

## 新出の英国史料からみた十八世紀末の西欧における

### 大黒屋光太夫日本図の評価

滝川祐子

はじめに

大黒屋光太夫（二七五一～一八二八）は、天明二年十二月（陽暦一七八三年一月）に廻船で遭難し、寛政四年（一七九二）にロシアから根室に帰還した伊勢の漂流民である。光太夫らはアリユーシャン列島のアムチトカ島に漂着の後、さらに多くの苦難に直面するも乗り越え、カムチャツカ、オホーツクを経て、やがてシベリアのイルクーツクに送られた。その地で光太夫はフィンランド出身の博物学者キリル・ラクスマン（Kirill Laxman, 一七三七～一七九六）と出会い交誼を結んだ。ラクスマンは商務長官ヴォロンツォフ（Alexander Voronsov, 一七四一～一八〇五）を通じ、エカテ

リーナ二世（Catherine II, 一七二九～一七九六）に光太夫らの送還と日本との通商交渉樹立の可能性を進言した。一七九二年、ロシアはイルクーツク総督名でキリルの息子アダム・ラクスマン（Adam Laxman, 一七六六～没年不明）を初の遣日使節として派遣し、通商交渉を図った。ラクスマンの来航は、レザノフ使節の長崎来航（一八〇四）やその後の日露問題の発端になるなど、十八世紀末から十九世紀前半の日本の対外政策に多大な影響を与えた。また光太夫らはロシアの言語・文化・地理をはじめ、見聞に基づく多くの西欧情報をもたらし、桂川甫周編纂の『北槎聞略』（一七九四）にまとめられたことも広く知られている。<sup>1)</sup>

一方、ロシアや西欧の知識人が光太夫から得た日本に関する知識も少なくなかった。その一つが、光太夫がロシアで作成した日

本図である。最初に確認されたのは、ドイツのゲッチンゲン大学図書館が所蔵する三枚の日本図<sup>②</sup>であった。その後、モスクワのロシア軍事歴史古文書館に光太夫自筆の日本地図が二枚存在することが確認された<sup>③</sup>。続いてエストニア国立公文書館に光太夫自筆の日本図一枚が現存することが報告された<sup>④</sup>。さらに二〇一四年、ロシアのエルミタージュ美術館に光太夫自筆の日本図一枚が所蔵されていたことが発表された<sup>⑤</sup>。従ってこれまでに光太夫自筆の日本図が七枚現存することが確認された。

この度、イギリスのロンドン南東部、グリニッジの国立海事博物館ケアード図書館から取り寄せた画像(図1)により、同図書館に大黒屋光太夫作日本図の写しが現存することを確認した。本稿では、まず、この日本図写しの発見の経緯となった史料を紹介する。次に画像の分析に基づき、これまでに報告された七枚の光太夫自筆の日本図と比較検討した概略を報告する。最後に本史料の歴史的意味を考察する。

#### 一 発見の経緯——チャールズ・ウィットワース書簡

筆者はこれまで、江戸時代に来日した西欧人によって持ち帰られ、博物学の進展に貢献した日本の博物図譜や魚類標本資料、科学者間の交流について在外調査を行ってきた<sup>⑥</sup>。二〇一七年、調査

の一環で英国公文書館が所蔵する外交文書を閲覧した際、イギリス側が大黒屋光太夫日本図の写しを極秘で入手したことを示す書簡を発見した。その書簡を引用者による和訳にて紹介する(傍線および「」内の補足は引用者による、以下同様)。

No. 9 サンクトペテルブルク 一七九三年二月七日「グレンヴィル閣下宛」<sup>⑦</sup>

閣下

私は閣下に日本島の非常に興味深い海図を送らせていただくことを光榮に存じます。これをお受け取りにならないはずはないものと自負しております。

一七九一年にラクスマン教授によってサンクトペテルブルクへ連れてこられた日本人は船長であり船主でもあり、その船は一七九一年七月「実際は一七八三年」にロシアの島アムチトカに漂着しました。彼は大変知的な人物であったようです。彼の所持品の中には蔵書があつたのです。ここで数か月、彼は異なる全ての沿岸部に関する蔵書中の書物に基づいて、日本島全体の海図を大縮尺で作成することに従事しました。

地図は非常に正確に見えますが、そこには測深値も暗礁も記されていません。おそらく、彼はロシア人により多くの情

報を与えないようにしたのでしよう。

そこには縮尺はありませんが、それでも航海者は日本島の両端の緯度と経度を決定すると簡単に縮尺を求めることができるとしよう。

彼にヨーロッパにある日本の地図を見せたところ、彼は、島の形態は全体的に実際とかけ離れてはいないが、それでも細部では非常に欠陥があり、岬間の距離が誤っている、と言いました。

この地図から、「日本には」二つではなく、一つの大きな島があり、国の南端に達する深い湾があり、それが航路として航海者に使われてきたようです。

この複製は原本（ここの文書館に保管されている）から最高の精度をもつて作られ、最も難しい部分であった日本語表記は、可能な限りの注意を払い、油紙「透写紙」に別々に写し取っております。

最高の敬意をもつてその荣誉に浴する

閣下の

最も従順で最も謙虚な僕しもべ

チャールズ・ウィットワース

この書簡を発見して以来、問題の日本図写しの所在を探したところ、二〇二〇年三月にグリニッジの国立海事博物館ケアード図書館のオンライン・カタログに、該当すると思われる史料の書誌情報を見つけた。同年五月の渡欧に併せて実物を閲覧する予定であったが、コロナ禍による渡航禁止と図書館の閉館が重なり、やむなく同図書館へ画像の作成を依頼し、同年九月二十二日に画像を受け取った。本来ならば実物を熟覧して報告すべきだが、本稿では画像とこれまでの調査から得られた知見を第一報として報告する。

## 二 新史料の特徴

本史料は、ケアード図書館の海図・地図コレクションの中で、グレンヴィル・コレクションとして登録されている（以下、本史料の略称をグリニッジが属する行政区 大ロンドン Greater London にちなみ、Lとする）。収集者のウィリアム・グレンヴィル (William Wyndham Grenville, 一七五九〜一八三四) は、従兄弟である小ピット (William Pitt, the Younger, 一七五九〜一八〇六) の政権時に外務大臣（一七九一〜一八〇二）を務め、その後一八〇六〜一八〇七年に首相となった人物である。前出の書簡は駐露公使チャールズ・ウィットワース (Charles Whitworth, 一七五二〜一八二五) が海図の写しをグレンヴィル

ルへ送ったことを示す。Lは、これまで確認された全ての光太夫自筆の日本図と同様に本州と九州が一体であり、日本列島の形態も全体的に似ている。書簡に示された来歴とLに描かれた日本列島の形態から、Lが光太夫の日本図写しであると判断した。そこで、Lと既報の光太夫自筆七図との相違点を調べ、同時にLの元となった原本が既報図に含まれるか否かを調べるため、画像と出版物の写真を比較検討した。本稿では所蔵機関と史料名に略称を用い、ゲッチンゲン大学図書館所蔵図（G1〔図2〕、G2〔図3〕、G3〔図4〕）、モスクワのロシア軍事歴史古文書館所蔵図（M1、M2）、エストニア国立公文書館所蔵図（E）、エルミタージュ美術館所蔵図（H）とする（表1）。比較検討のためにG1とG3、E、Lの五点はデジタル画像を、M1、M2、Hの三点は出版物の写真を用いた。G1とG3は実物を閲覧し寸法を測った。この三点以外の寸法等は既報の論文を参照した。Lの書誌情報はケアド図書館のホームページのカタログ情報を参照した。Lの主な特徴は、他の七点の地図を比較すると、以下の通りである。

〈寸法〉 LはE、H以外の五点とほぼ同等のサイズである。

〈製作者、署名、印判〉 Lには光太夫自筆の署名、捺印がなく、全て西欧人の手による複製（英文書簡の表現からウィットワース自身）と考えられる。一方、既報の七点には光太夫の署名と二種類の印

（M1は手書きか）があり、全て光太夫の自筆であると考えられる。〈製作年と作成地〉 L自体に製作年月日の情報はないが、ウィットワースの書簡から、一七九三年二月七日以前にサンクトペテルブルクの文書館が所蔵する日本図を元に作成されたと推定される。

アッシュはゲッチンゲン大学の古代言語学の教授で大学図書館の館長を務めたハイネ（Christian Godtob Heyne、一七二九～一八一二）<sup>10</sup>宛に、自筆で作成した詳細な目録を添えてコレクションを送付した。その目録の日付によると、光太夫の日本図は、一七九三年四月三／十四日〔旧暦／新暦〕に二点〔G2、G3〕、一七九四年五月二十二／六月二日〔旧暦／新暦〕に一点〔G1〕イルクトラックから受け取った地図」と、二度に分けてアッシュによりサンクトペテルブルクから送られた（表2）。ウィットワース書簡の日付から、Lはアッシュがゲッチンゲン大学に光太夫日本図三点を送付する前にイギリスへ発送済みであったといえる。したがって、G1とG3がLの原本となる可能性は残る。ただし、アッシュが文書館に保管されていた原本を入手し、ゲッチンゲン大学に贈ることができたか否かについては、今後の検討を要する。

〈文字情報〉 Lには枠外に英語で書かれた“A Chart of Japan or Zion”〔ジャパンまたはニホンの海図〕以外に文字情報がない。これは書簡の「最も難しい部分であった日本語表記は、〔略〕別々に写し取って」の記述と一致する。既報の七点には日本語で地名が記

されている。補足情報がG1、G2、M2、Eにはロシア語(背面にドイツ語注記あり)、Hにはドイツ語で書き込まれている。

〈櫓〉 G1からG3の三点について、日本図の天守閣や三種の櫓はスタンプで捺印されていることが指摘されており、筆者も原本で確認した。同じスタンプがM1、M2、E、Hにも用いられている。一方、Lの天守閣や櫓は全てペン書きであり、櫓の石垣の輪郭を表した四本の直線(一見して高床式倉庫の脚部のように見える)も写している。櫓の地面には、自筆図にない脚部の影が東側に向かつて描かれている。これは複製の作者が石垣の輪郭線を脚部と解釈したからであろう。この影の加筆も、Lが西欧人の手による写しという仮説を裏付けるものである。

〈城郭〉 六つの城郭(江戸、大坂、駿府、尾張、紀伊、水戸)の描写、天守閣と櫓の位置、地図上の位置は史料によつてかなり異なる(表1)。Lは天守閣と櫓の位置とM1に最も似ている。G2、G3は天守閣と櫓の位置がLと異なる部分もあるが、城郭のスタイルは似ている。

〈富士山の形状、位置〉 富士山の形態とその位置については地図により違いが大きい。今回の検討では、Lの原本となった図を決定することはできなかった。

〈史料の由来〉 L以外の由来を以下にまとめる。G1〜G3はゲオルク・トーマス・フォン・アッシュ(Georg Thomas von Asch,

一七二九〜一八〇七)が母校ゲッチンゲン大学に寄贈したアッシュ・コレクシヨンの一部である。アッシュはドイツ系ロシア人の医師としてロシア政府に仕えた。そのコレクシヨンはロシアとその周辺域から収集された自然史標本、手稿書、書籍、民俗資料、地図や図、古銭など、多様なジャンルからなる学術資料として有名である。<sup>12</sup> アッシュの名は光太夫の人名録にも記録されていることから、アッシュはキリル・ラクスマンを通じて光太夫と会ったと思われる。M1、M2がモスクワのロシア軍事歴史古文書館の所蔵となつた経緯は不明であるが、製作地がサンクトペテルブルクであることから、後にモスクワへ移管されたと考えられる。Eはクルーゼンシュテルン収集の地図集に収められている点から、実用的航海資料としての利用を実証する史料と指摘されている。<sup>13</sup>

エストニア出身のクルーゼンシュテルン(Adam Johann von Krusenstern, 一七七〇〜一八四六)はロシア初の世界周航に成功したナジェージダ号の艦長であり、一八〇四年に全権使節のレザノフと長崎に来航した。彼はアダム・ラクスマンが加藤肩吾から得た「松前地図」の写しを反映したロシア地図を所持していたが、航海記の中でそれを光太夫に由来するものと記述した。<sup>14</sup> クルーゼンシュテルンは「松前地図」の作者と光太夫を混同したと思われるが、この点も光太夫由来のEを活用したことを示すのではないか。Eの入手経緯の解明が求められる。Hは、地図に書き込まれたド

イツ語の筆跡により、ロシアに仕えたドイツ人の薬学・植物学者  
ジーファース (Johann August Karl Severs, 一七六一〜一七九五) 旧蔵の  
地図と報告された。<sup>17)</sup>

〈四国東側の南北線〉Lに描かれた四国のすぐ東側に地図を南北に  
貫く縦線が引かれている。該当する線はどの地図にもないが、  
G2の同じ位置に紙を貼り継ぎ、折った部分があり、明瞭な直線  
のように見える。この折目の位置がLの縦線の位置と一致する。

〈その他〉M1は唯一、福知山城を欠くほか、上野と下野の境界線  
が出羽まで北へ伸びる。

画像と写真を比較したが、Lの原本となつた史料を既報の七点  
から一図に決定することはできなかった。Lが「最高の精度」で  
作成された複製であるとする、既報の七点以外が原本となつた  
可能性もあるだろう。今回の比較検討により、七点の文字情報以  
外の特徴から、光太夫自筆の日本図を、①G1、②EとH(類似  
点…寸法、海域面積、城郭)、③その他、と大きく三タイプに分類で  
き、Lは③に属すると考えられた。G2、G3の余白に針穴が認  
められたこと、沿岸域の湾が複雑に入り組んだ形状なども七点に  
共通していることから、複製は薄紙等で原本を透写し、作成され  
たことが推察された。今後、実物を閲覧して詳細に検討すること  
が必要である。

### 三 ペテルブルクの光太夫——マシュー・ガスリの記事

光太夫がイルクーツクで描いた日本図のことは、一七九〇年版  
ペテルブルクのロシア帝国科学アカデミー新会報第八卷(二七九四  
出版)、五月十七日の事項に記録された。<sup>18)</sup>

「科学アカデミーの」秘書は、イルクーツク三月二十日付、宮  
廷顧問ラクスマンからの手紙を読み上げた。それは日本の商  
人、大黒屋光太夫によつて描かれた一枚の日本島の地図を送  
る「という」手紙であつた。この地図はいくつもの点でケン  
ベルの地図と異なり、細部はより正確である。この送付物に  
は植物園のために、植物の種子が三袋添付されていた。

この新会報から、光太夫がイルクーツクで作成した一枚の日本  
図は、一七九〇年三月二十日にキリル・ラクスマンによつてペテ  
ルブルクのロシア帝国科学アカデミーに送付され、同アカデミー  
の同年五月十七日の会議で報告されたことが分かる。

ラクスマンを通じ、光太夫はイルクーツクから帝都ペテルブル  
クへ帰国請願書を三度出したが、いずれもよい返事を得られな  
かつた。その後ロシア政府は光太夫らが日本語教師としてこのま

まロシアに仕官するか商人になるよう申し渡し、それまで支給していた給費を止めた。このため、光太夫はラクスマンの提案で共に帝都へ移動し、直訴の機会をうかがった。こうして光太夫はラクスマンらと一七九一年一月十五日にイルクーツクを出発し、同年二月十九日にペテルブルクに到着した。<sup>(20)</sup>

光太夫が製作した日本図のうち六枚はペテルブルクで描かれた(表1)<sup>(21)</sup>。この地で光太夫が地図を作成する様子を目撃した人物がいた。スコットランド人医師で、三十年以上もロシア政府に仕えたマシュー・ガスリ(Matthew Guthrie, 一七四三〜一八〇七)である。<sup>(22)</sup> 彼はスコットランドの農学者ジェームス・アンダーソン(James Anderson, 一七三九〜一八〇八)<sup>(23)</sup>が編集した文芸雑誌*The Bee*に“Arcticus”(北極)の筆名でロシアの文化や博物学情報を寄稿した。この投稿文から、光太夫に関する記事を引用者の和訳により転載する。

コーダ「光太夫」は、コックスやフランス領事のレセップスがかムチャツカの旅で紹介した日本の商人だが、彼の庇護者であり友人であり、またシベリアの化石の探索者であるイルクーツク在住の「宮廷」顧問ラクスマンによって去年の冬に連れてこられ、二、三か月我々とともに留まっていた。その有能な鉱物学者の宿舎と、著名な博物学者であるパラス博

士の邸宅の両邸で、私はしばしば彼に会う機会を得た。彼は小さく、がっちりした健康な体で、長い黒髪を後ろで束ね、スペイン人のような顔色で、洞察力の優れた黒い眼である。

彼はペテルブルクでは西歐式の服装だった。彼が難破船から持ち出すことができた物は、ずっと前に着古されてしまったに違いないので。彼の人生と国とを考えれば、彼が示した知識のレベルに、我々は皆驚いた。例えば、私の友人であるパラスの温室で、彼は彼の島「国」に原産する植物を我々に示した。また私は彼がいつも自宅(ラクスマンの住居)で、彼の国の海図、特に彼が出航した地域の海図作成に従事するのを見た。

それら「海図」はほぼ中国式だった\*。彼は難破船から二、三冊の本を救出していた。一冊は一種の歴史と地理に関する著作物で、もう一冊は宗教に関するものだ、と彼は言った。彼はロシア語で自分の意思を伝えることができ、彼の性格と行動の穏やかさは、レセップスが彼について描写する所が全てのようにだった。手短かにいえば、自宅での彼の全ての楽しみは、パイプと本と海図であるようだった。女王陛下は、陛下の負担で、オホーツクで装備を整えた船に乗せて彼を祖国へ送り届けるよう、またラクスマンの息子が同行し、彼を日本へ安全に送り届けるよう命じた。彼の不運は他の言語で

も、そして間違いなく英語でも伝えられてきたので、ペテルブルクで日本人に会うという珍しい現象の原因はご存じの通りだろう。彼は所有する船で日本から航行したが、その船には幸いにも彼と乗組員の食糧となる米を積んでいて、彼が難破してフォックス諸島<sup>25</sup>の一部に漂着するまでの信じられないほどの時間、彼の船が舵もないまま風に翻弄された。カムチャツカへ連れていかれるまで、彼はそこで長い間ロシア人と住んだ。彼が「ロシア」帝国に入国して以来、ほかの残りの乗組員とともに、彼は主にイルクーツクのラクスマンと住んでおり、そのうちの一人「新蔵」だけがここ「ペテルブルク」に彼といる。「以下略」

\*それらの海図のうち何枚か保管されていますか？ その一枚でも得られるなら、私は特別にお願いして一枚入手したい。

編集者注。

ガスリの描写は、帝都の錚々たる博物学者が集まるサロンの中で、光太夫が教養ある人物として一目置かれ、日本に関する知識を共有する様子を伝える貴重な記録である。『レセツプス旅行日誌』<sup>26</sup>に描かれた光太夫が当時既に有名であり、それをガスリも読んでいたことが分かる。ガスリの記録はレセツプスより後のもの

であるが、ペテルブルク滞在中の光太夫を直接伝える描写として最初のものである。ガスリが光太夫と会ったのは「去年の冬」、すなわち光太夫らが帝都に到着した一七九一年二月十九日以降のことである。到着後程なくラクスマンが大病を患い、光太夫は懸命に看病したが、回復までに八、九十日かかった。同年五月一日に皇帝エカテリーナ二世が夏の離宮ツァールスコエ・セローへ移動したため、五月八日から光太夫はラクスマンとともに離宮の庭番のブシ (Joseph Charles Bush, 一七五九〜一八三八)<sup>27</sup>宅に滞在し、皇帝拜謁の機会をうかがった。一方、ペテルブルクで作成した地図のうち、判明した中で日付が最も早いのは、Eの三月上旬である(表1)。よって、ガスリが光太夫と会った期間は、ラクスマンが回復中の期間を含め、一七九一年三月〜五月上旬の二か月余りの期間であったと推定される。

ガスリはスコットランド出身の英国人医師であったが、ロシア政府に仕官し、博物学者としてラクスマンやパラス (Peter Simon Pallas, 一七四一〜一八一) と交誼を結んだ。パラスはエカテリーナ二世の命を受け、シベリアを探検し、動植物学や民族学に貢献した著名なドイツ人博物学者である。<sup>28</sup>「ラクスマン教授は、ロシアの味方だと彼が判断した友人に対しては非常に話の通じる人物」<sup>29</sup>とあるように、ガスリはラクスマンからロシア側の人物、かつ博物学仲間として認識されていたので、光太夫が地図作成に取り組



む様子まで身近に見ることができたのである。

一方、光太夫の送還と日露通商交渉を画策していたラクスマンは、光太夫がイギリスとオランダの外交官に会うことを非常に警戒していた。<sup>31</sup> 彼が最も警戒したのが、前述の駐露英国公使ウィットワースであった。ガスリとウィットワースによる光太夫の洋装の解釈は、興味深い対比をなす。ガスリは、「和装が着古されてしまった」と考えた。パラスから情報を得ていたと考えられるウィットワースは、ラクスマンが警戒し「光太夫は自国の服を持っていったのに、ロシアの服を着せられていた」と報告する。<sup>32</sup> 『北極聞略』によると、光太夫は最後まで和装一式を手放さず、帰国前にラクスマンの娘マリヤに全てを与えた。<sup>33</sup> またイルクーツクから帰国する直前に、ジーファースは和装の光太夫を描き、「我が友光太夫、日本の船長、再び日本へ旅立った 一七九二年五月十日」と記した。<sup>34</sup> ジーファースはイルクーツクで光太夫に二度会った記録が残る（一度目は一七九〇年五月二十七日）。<sup>35</sup> Hにはこのジーファースによるドイツ語の書き込みがあるとの報告から推察すると、彼は日本図を介した知的友好関係を光太夫と築いており、親しみと惜別の念を込めて「我が友」と記したのかもしれない。

ガスリは光太夫が「一種の歴史と地理に関する著作物」を所持していたと記すが、これは「節用集」を指すものと推察される。光太夫がロシアに残した本の表紙には「節用 式冊」を含む七種

の蔵書記録があると報告されている。<sup>36</sup> 先行研究により、各種の節用集と同様の日本図が『年代記絵抄』にも収録されていること、および光太夫日本図には、同書に見られる「つかる〔津軽〕八方」（多くの節用集では合浦<sup>がっほ</sup>）の誤りをそのまま「八つほう」と写すことから、『年代記絵抄』が原本である可能性が高いことが指摘されている。<sup>37</sup> このようにガスリの記述によつて、光太夫がペテルブルクのラクスマンの宿舎で地図作成に従事している様子を再現することが可能となったといえる。

#### 四 同時代の西欧人による光太夫日本図の記録

光太夫が描いた日本図は、同時代の西欧人にどのように受け止められたのだろうか？ これまでに確認した範囲で、当時の文献史料に記された光太夫日本図に関する記録を年代順にまとめた（表2）。そこから光太夫日本図は、同時代の西欧の科学者、政治家、外交官、実業家に広く関心を持たれていたことが分かった。

先に述べたガスリによる *The Bee* の一七九二年五月十六日号の寄稿は、出版された光太夫日本図の記録として現在のところ最も古いものである。ガスリの寄稿には続きがあり、一年後の一七九三年五月十五日号の寄稿で、海図の保管場所を見つけ、編集者であるアンダーソンのためにコピーを入手したことを報告した。同年

七月三日号の中でも、光太夫が作成した未発表の海図について再度触れている。

ブルーメンバッハ (Johann Friedrich Blumenbach, 一七五二～一八四〇) はドイツのハノーファー選帝侯国のゲッチンゲン大学の医学、人類学、博物学の教授であり、一七七六年に王立学術博物館の初代館長に就任した人物である。<sup>(40)</sup> ジョセフ・バンクス (Joseph Banks, 一七四三～一八二〇) は、キャプテン・クックの第一回航海(一七六八～一七七二)に私費を投じて参加し、膨大な博物資料を持ち帰ったイギリスの博物学者である。帰国後は、ロンドン郊外のキューに設立した王立植物園の事実上の初代園長、王立協会の会長(一七七八～一八二〇)など多くの役職を務めたほか、リンネ協会の設立(一七八八)にも尽力するなど、イギリスの博物学に大きな業績を残した。<sup>(41)</sup>

ブルーメンバッハとバンクスの交流は博物学者同志の交流であつたが、ハノーファーとイギリスが当時同君連合であつたため、ハノーファー政府とロンドン在住の国王を結ぶ四半期ごとの公式定期便を活用して書簡を交わしていた。<sup>(42)</sup> ブルーメンバッハからバンクス宛、一七九四年九月二十四日の書簡から光太夫日本図に関する部分<sup>(43)</sup>を、引用者の和訳により転載する。

最近、私どもの図書館に一枚の興味深く新しい大型の日本

の海図が送られてきており、それには「地」名が日本の文字で印刷され、手書きのロシア文字で説明が書かれています。

もしその海図が、閣下ご自身か、ダルリンプル氏にとりまして何かしらご関心のあるものでしたら、私は最大の喜びとともにその正確な複製を調達致します。「以下略」

この海図は、「最近」ゲッチンゲンに送付された「一枚」の海図であり、「日本の文字」と「ロシア文字」による書き込みがある点から、G Iを指すと考えられる。ダルリンプル (Alexander Dalrymple, 一七三七～一八〇八) については後述するが、海図の製作者として著名であつた。ブルーメンバッハの申し出に対し、バンクスの返事の手簡には、この件に関する依頼も断りも書かれていない。<sup>(44)</sup> しかし、他の件に関してはそれぞれに返答が書かれている。

この無回答の理由については明らかではないが、バンクスが無関心であつたか、あるいはウィットワースが送付した日本図<sup>(45)</sup>について既に把握していたため触れなかつたか、どちらかと思われる。

一方、バンクスがウプサラのツェンベリーに送つた一七八五年六月十七日付の書簡からは、バンクスの対日貿易に関する高い関心が示されている。同書簡には、イギリス商人がアメリカの北西海岸の原住民と毛皮貿易を行い、それを日本の「北方の」原住民と貿易を行う意向があること、そのため皇帝から自立している日

本の北方地域における「イギリス船の」貿易の可能性について照会していたのである。<sup>45)</sup> ツェンペリー (Carl Peter Thunberg, 一七四三〜一八二八) はオランダ商館の医師として一七五五〜一七七六年に来日した博物学者である。彼は動植物についてはもとより、日本の社会・経済についても当時西欧での第一人者であった。よって、バンクスがブルーメンバッハに日本の海図について無回答だったのは、少なくとも無関心のためではない。

ブルーメンバッハは、バンクスへ送付した書簡と同様の書簡を、ドイツ、ゴータの天文学者ツァッハ (Franz Xaver von Zach, 一七五四〜一八三二)<sup>46)</sup> にも送付したと推察される。その返事に相当するツァッハからブルーメンバッハ宛、一七九八年五月二十二、二十七日付の書簡<sup>47)</sup>の中で、ツァッハは自身が編集する『天文地理学雑誌』<sup>48)</sup>への光太夫日本図に関する寄稿と日本図「写しか?」の送付を依頼した。光太夫日本図をラペルーズの海図と批判的に比較し、その縮小地図を掲載することも考えていたようである。しかしその後、彼の雑誌に光太夫日本図の縮小版複製は掲載されなかった。

イートン (William Eton) は一七九〇年代にサンクトペテルブルクの英国大使館に通商顧問として所属した人物である。<sup>49)</sup> 彼は著書『トルコ帝国概説』(一七九九)の中で、光太夫の日本図について記録した。<sup>50)</sup> 彼はサンクトペテルブルクの英国大使館で、大使

ウィットワースを通し、直接複製の日本図を見たと思われる。

クルーゼンシュテルンと光太夫日本図については第二章〈史料の由来〉で述べた。

このように、西欧に残る光太夫の日本図に関する記録から、光太夫の日本図の受け止め方を、受け手の属性、つまり(一)博物学者、(二)政治、外交、通商関係者、と大きく二つに分類することができる。実物の光太夫日本図は、十八世紀末の西欧人の博物学者間のネットワークを介し、サンクトペテルブルクからハノーファー選帝侯国のゲッチンゲン大学に寄贈された。またその情報は、同じく博物学者間の知的交流を媒介に、ロシアからスコットランド経由でイギリス、同君連合のハノーファーからイギリス、ドイツ内のゲッチンゲンからゴータのような経路で共有され、注目されていたことが分かった。特にアンダーソン、ツァッハのような学者は、自身の編集する科学雑誌に図を掲載し、出版予定であったことが判明したが、それは何らかの理由で実現しなかった。ラペルーズの探検航海の後、最新の海図が出版された後には、やがて科学的価値を失ったとも考えられる。

一方、イギリスの政治家、外交官、通商関係者にとっても、光太夫日本図は最新の日本の海図情報と映った。特にロシアとの極東における貿易競争を制するために、ロシアから入手しなければならぬ情報であった。ウィットワースが複製を製作してイギリ

スへ送付した時期は、ガスを除く全ての博物学者らの情報共有よりも早い。結果的に、光太夫日本図が学術雑誌に出版される計画はいずれも実現しなかったのに対し、政治、外交、通商分野における必要性からは迅速に写しが作成された。結局、これらの政治的ニーズに応じて作成された複製が直ちにイギリスへ送られ、後世に残ることになったといえよう。

## 五 イギリスが入手した光太夫日本図の歴史の意味

なぜイギリスは光太夫日本図の写しを入手したのか？ 十八世紀末におけるLの歴史の意味を(1)十八世紀後半の北太平洋へのイギリスの進出状況、(2)グレンヴィル・コレクションの特色、(3)西欧人による日本沿岸測量図、(4)日本で製作された地図情報の西欧への流出時期、(5)光太夫の人物像から考察する。

### (1) 北太平洋の覇権争い

十八世紀後半、北米の太平洋岸では毛皮貿易とその交易拠点をめぐり、西欧諸国が熾烈な競争を展開した。特にクックの第三回航海(一七七六～一七八〇)により北米の北太平洋沿岸が探索され、北西海岸のラッコの毛皮が中国で莫大な富をもたらすことが知られると、商業権と領土権をめぐり獲得競争が繰り広げられた。<sup>(51)</sup>

北西海岸にはトルデシリヤス条約によってアメリカ大陸の領有権を持つと見なしていたスペインと、アラスカで植民地活動を行い、南下を開始していたロシアが進出していた。<sup>(52)</sup> 北太平洋の交易圏を押さえることは、海洋帝国として極東進出を目指すイギリスにとって長年の重要課題であった。実際、クックの第三回航海の秘密訓令にも、北西・北東航路の探索が含まれていた。<sup>(53)</sup> イギリスのクック隊による北米の太平洋岸の探検は、ロシアやスペインを警戒させた。クック隊に刺激され、フランスもラペルーズの探検隊を太平洋へ派遣した。<sup>(54)</sup> イギリスから独立したばかりのアメリカ合衆国も、商機を狙って太平洋へ進出した。<sup>(55)</sup>

一七八九年、ヌートカ湾に駐屯地を建設したスペインが、この地に停泊したイギリスの交易船を拿捕したことを発端としたヌートカ湾事件が発生した。イギリスは一七九〇年のヌートカ湾協定により、事実上この地で「貿易と航海の自由」を得ることに成功した。<sup>(56)</sup> イギリスの私貿易商人のみならず、政府も北米毛皮貿易に関心を示し、日本を含む東アジアでの通商展開を論じた。<sup>(57)</sup> イギリスの対日通商への動きに対し、対日貿易を独占していたオランダは危機感を抱いた。<sup>(58)</sup> ロシアとイギリスは、それぞれに光太夫の送還を名目に日本との交易を画策しており、互いの動向を注視していた。<sup>(59)</sup> イギリスは光太夫をマカートニー使節の通訳として用い、中国訪問の後に対日通商交渉を進めようと画策していたが、光太

夫との接触はロシア側の警戒により実現しなかった。マカートニーは一七九三年に清の乾隆帝に謁見し、通商交渉を行ったが失敗に終わった<sup>(61)</sup>。光太夫とマカートニー使節との関係は改めて論じたい。つまりこの時期のイギリスは、北太平洋の覇権争いの中で優位に立ちつつあったが、極東ではマカートニー使節が中国と交渉に失敗し、日本との交渉も実現しなかったように、また他の西欧諸国と競争の渦中であつたといえる。

## (2) グレンヴィル・コレクションの特色

ケアード図書館のオンライン・カタログを見ると、グレンヴィル・コレクションには一三〇〇点の地図・海図が登録されている。画像が掲載されているものはその一部ではあるが、河川や沿岸域の港湾、要塞、海峡、水路、有名な陸海の戦場の陣営など、軍事的な地理情報であることが分かる。地図・海図の大部分は出版物であるが、手稿も含まれている。また大半はイギリスを含めたヨーロッパの地図・海図であるが、世界全域を網羅している。日本全域を単独で網羅した地図・海図は1のみであり、他は東アジア全体図など広域図に含まれるものであった。同図書館の資料紹介によると、このコレクションはグレンヴィルが外務大臣に就任中（一七九一〜一八〇一）の比較的短期間に、特に当時のヨーロッパの軍事情勢を知るための実用的な資料として収集されたものと

いう<sup>(62)</sup>。

コレクションの性格を把握するため、カタログ情報から出版年あるいは作成年情報を年代別にまとめた（図5）。図5から地図・海図の出版・作成年の大半が十八世紀後半であり、特に一七八一年から一八〇〇年の収集数は全体の約六割を占めることから、グレンヴィルが収集しうる最新の地理情報であつたことが確認された。よつてこの特徴からも、1は最新の日本海図情報としてコレクションに加えられたものと考えられる。

(3) イギリスが入手し得た日本沿岸測量図と光太夫日本図の写し  
イギリスが十八世紀後半までに掌握した日本の海図と、光太夫日本図写しを入手した時期（一七九三年）について考察する。広義の「日本地図」であれば、西欧にはイエズス会が持ち帰った情報に基づく地図や、ケンペルが日本から持ち帰り『日本誌』（英訳出版一七二七年）の中で出版された日本図を始め、後の追加情報によつて徐々に進化したものが多数存在していた<sup>(63)</sup>。しかしこの頃、イギリスは実測値を重視し、海図を求めていた。なかでもイギリス東インド会社水路部長で、一七九五年にイギリス初代海軍水路局長に就任したダルリンプルは、水路測量に基づく海図の作成と蓄積に取り組んでいた<sup>(64)</sup>。日本に関する海図の一例を挙げると、彼が編纂した海図集の中には、古いオランダの地図であるが、水深

の計測値が書き込まれ、水路図として有効な長崎の港湾図が含まれている<sup>(65)</sup>。

表3は十七世紀から十九世紀初頭まで、フリースの探検<sup>(66)</sup>以降、西欧諸国が日本近海を航行し、測量した値を反映した日本の海図を時系列にまとめたものである。日本の北方では、一六四三年にオランダのフリース探検隊が北海道の東部太平洋側とエトロフ島、ウルップ島の一部、サハリン南部を測量した。その実測図は一六五〇年のヤンソンニウス以降の西欧地図に長く用いられた<sup>(67)</sup>。一七三九年にはロシアのシュパンベルグ探検隊が千島列島を南下し仙台湾に至った。その実測地図は、一七四五年のロシア科学アカデミーが出版した『ロシア帝国地図帳』の「ロシア帝国全図」に採用された<sup>(68)</sup>。

イギリスによる日本の海図作成は、クックの第三回航海を嚆矢とする。クックの死後、後任のキング艦長は、三陸沖から房総沖までの本州太平洋沿岸と硫黄島を海上から測量し、沿岸図を作成した<sup>(69)</sup>。クックの第三回航海誌(図版含む)は一七八四年六月に出版された<sup>(70)</sup>。

次に日本近海を探検したのはフランスのラペルーズ隊の世界周航(一七八五〜一七八八年)である。ラペルーズ隊は一七八七年に与那国島から日本海を北上し、能登半島で緯度・経度を測定、間宮海峡に接近した後、宗谷海峡を発見、千島列島を北上し、カム

チャツカのペテロパブロフスクに到着した<sup>(71)</sup>。そこで下船し、そこまでの航海誌を預かりロシア経由で帰国したが、光太夫の記録を残した前述のレセップスであった<sup>(72)</sup>。ラペルーズ隊はペテロパブロフスクから南下し、一七八八年一月二十六日にオーストラリア東海岸のボタニー湾に達したが、その地を同年三月十日に出航して以降、消息を絶った。カムチャツカからオーストラリアまでの航海日誌とデータは、イギリス人に託送されてフランスへ届けられた。これらの航海誌、地図、写生図は、フランス革命後の一七九一年、国民議会によって出版を議決され、一七九七年に航海誌とアトラスが出版された<sup>(73)</sup>。

クックの第三回航海以降、イギリスが独自に日本近海の測量値を得たのは、ヌートカ湾事件後に解放されたコルネットの私貿易船アルゴノート号の航海(一七九一年、北九州から中国地方西部の日本海沿岸を測量<sup>(74)</sup>)と、ブロートンのプロビデンス号とスクーナー船による探検航海であった<sup>(75)</sup>。ブロートンは一七九六年から一七九七年の間、二度の日本近海探検を行った結果、室蘭、北海道南岸、千島列島、琉球列島から本州の太平洋沿岸、津軽海峡、北海道の日本海側、サハリン、湾と見なしたタタール海峡(間宮海峡)、沿海地方から中国大陸沿いを航行した。ブロートンは一七九八年五月二十八日にスリランカ北東海岸のトリンコマリーで解任され<sup>(76)</sup>、一七九九年二月にイギリスへ帰国<sup>(77)</sup>、一八〇四年に航海誌を出版し

た。ブロートンは蝦夷地で加藤肩吾と出会い、日本人が作成した二種類の地図を入手したが、それらについては後述する。

つまり、一七八四年のクック第三回航海誌の出版以降、一七九〇年代末まで、イギリスが独占的に有した日本の測量値は九州北部の玄界灘から島根までの日本海沿岸のみであった。一七九七年にラベルズの航海誌が出版されるまで、またブロートンの海図が届くまで、イギリスは測量に基づいた日本広域の海図を所持していなかったといえる。

(4) 「松前地図」と『改正日本輿地路程全図』が西欧に流出した時期

十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、ロシアが日本で二種類の日本地図情報を手に入れたことが先行研究により報告されている。一つは松前藩の侍医である加藤肩吾が編集した「松前地図」と題する地図<sup>78)</sup>の写しで、北海道、カラフト島、南千島諸島を含む。アダム・ラクスマンが根室に来航した際、松前から派遣された加藤と上級役人の鈴木熊蔵がこの地図を持参しており、相互に地図を貸借して写し合い、地理情報を交換した<sup>79)</sup>。この時の模様は、ラクスマンの「日本来航日誌」の一七九二年十二月十三〜十四日の事項に記述された<sup>80)</sup>。ロシア側が持ち帰った「松前地図」写しと思われる地図がポストニコフの論文に掲載されている<sup>81)</sup>。この「松前地

図」写しに描かれたマツマエ島とカラフト島は、一八〇二年にペテルブルクのロシア帝国部で出版された「太平洋におけるロシア航海者たちの発見地図」にそのまま写された<sup>82)</sup>。クルーゼンシュテルンが航海記に引用した地名——北海道南西の島の O-sima (大島)、Ko-sima (小島)、渡島半島の Sineko (洲根子)——から、彼がこの印刷された地図を携帯していたことが分かる。彼が「松前地図」の作者と光太夫を混同した点については第二章で述べた通りである。

もう一方の地図が長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』である。近年、複数の在外資料に基づき調査研究から、この地図のヨーロッパへの流出時期、地図に掲載された地名など地理情報の翻訳、地図と翻訳情報の伝播、近代日本地図製作時の活用について、詳細な研究成果が報告されている<sup>83)</sup>。『改正日本輿地路程全図』が日本から渡欧したルートは、日蘭関係と日露関係を媒介とする大きく二つのルートがあった。ここで『改正日本輿地路程全図』の最も古い流出時期とその経緯、情報の流布について二つのルートに分けて整理する。

まず日蘭関係ルートでは、オランダ商館館長ティッティング(日本滞在…一七七九年八月〜一七八〇年十一月、一七八一年八月〜一七八三年十一月、一七八四年八月〜十一月)<sup>84)</sup>、オランダ商館医師シーボルト(第一回目来日…一八二三年八月〜一八三〇年一月)<sup>85)</sup>が『改正

日本輿地路程全図』を持ち帰っている。

ライデン大学図書館が所蔵するシーボルト将来の『改正日本輿地路程全図』三点のうち、No. 220aは一七七九年（安永八）刊行の初版である。<sup>87</sup>これが松井・レクインによる史料検討の結果、<sup>88</sup>ティツィング自筆の番号と地名の書き込みがあり、ティツィングの死後、クラブプロートの手に渡り、彼の死後シーボルトが入手した地図であることが明らかになった。同論文に引用されている一七九二年一月二日付、ティツィングからアムステルダム在住の兄宛の書簡<sup>89</sup>の内容はこの地図を指すと思われることから、一七九二年か翌年にはこの地図がオランダに渡ったと考えられる。さらに同論文はライデン大学図書館の地図No. 220bとオランダ国立図書館の地名一覧が元々はティツィングに属したセットの史料であったことを明らかにした。またオランダ王立科学アカデミー所蔵史料から、ティツィングが『日本に関する記述』の最終版草稿に地図の地名番号に対応するリストを作成して出版準備をし、一八一一年にこの草稿をアカデミーに寄託したが、ティツィングの草稿は出版されなかったことを示した。シーボルトによると、クラブプロートはティツィングの死後、これらの地図と草稿を用いてフランス語訳を作成し、自身の業績として一八二〇年にサンクトペテルブルクのロシア帝国陸軍参謀本部の地図保管所へ送り、同様の日本地図を大英博物館にも寄贈したという。<sup>90</sup>なおティツィ

ングは三十二年に及ぶ東洋での任務を終え、一七九六年十二月にロンドンに戻った。<sup>91</sup>一八〇〇年四月の月刊誌にティツィングの日本コレクションに関する記事が掲載された。そこにいくつかの逸品の一つとして日本人が作成した大きな日本図について紹介された。ティツィングが西欧にもたらした『改正日本輿地路程全図』の存在は、彼が西欧に戻りロンドンを拠点として間もなく知られるようになり、一八〇〇年には記事に取り上げられるほど注目されていったといえる。

次に日露関係ルートから流出した『改正日本輿地路程全図』について検討する。

ロシア側が日本から直接この地図を入手した時期について、先行研究では十九世紀初頭のレザノフ使節来日時とするポストニコフの説と、十八世紀末のラクスマン使節の根室来航時とする小林・鳴海の説がある。<sup>92</sup>ポストニコフはその具体的根拠を示していないが、日本で刊行された地図を元にして作成された一八〇九年製と一八一〇年製の日本図を紹介していることから、その年代に近いレザノフ使節の長崎滞在年（一八〇四〜一八〇五年）の入手を想定したと思われる。掲載されたロシア軍事歴史古文書館が所蔵する一八一〇年製の地図を見ると、長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』に由来する地図の写しであることが分かる。特にその形状、色合いはエストニア国立公文書館が所蔵するクルーゼン



シュテルンの地図集に含まれる新蔵・善六訳「日本国の一般図」<sup>95</sup>とよく似ている。ロシア軍事歴史古文書館の地図については今後の研究報告を待ちたい。

十八世紀末にラクスマン使節が長久保赤水図をロシアに持ち帰ったとする小林・鳴海の説は、二点を根拠とする。一点目はクルーゼンシュテルンによる『太平洋水路測量記録集』（一八二七年）の記述<sup>96</sup>に基づく。その記述を以下にまとめる。クルーゼンシュテルンは世界周航後にアトラス（ロシア語版：一八一三年出版）を作成する際、サンクトペテルブルクの帝国科学アカデミー所蔵のラクスマンが持ち帰った日本地図を精査したが、その時は翻訳がないため地図を活用できなかった。その後、ワイマール大公が所有する日本地図の写しを提供され、別途入手したクラプロートによるフランス語訳とともにその日本地図を活用することができた。またワイマール大公所有の日本地図は、サンクトペテルブルクの科学アカデミー所有のラクスマンが持ち帰った日本地図と完全に一致したという。しかし科学アカデミーの地図はクルーゼンシュテルンが一度目に見た後、失われてしまった。

二点目の根拠は、イギリスのブロートンが蝦夷地の内浦湾へ二度来航した際の地図情報の交換に基づくものである。『改正日本輿地路程全図』を明示する記録はないとはいえ、加藤とブロートンとの交流をみると、加藤からラクスマンにも同様に地図が提供さ

れた可能性は十分にあるとする<sup>97</sup>。

筆者は加藤肩吾が提供した日本の地図情報が、ラクスマン来航時とブロートン来航時では異なり、ラクスマンには「松前地図」のみを、ブロートンには「松前地図」と『改正日本輿地路程全図』の両方であったと考える。

まずブロートンについては、一度目の来航時の一七九六年九月二十五日の記述<sup>98</sup>に、大きな日本の北方諸島の地図を写すのを許可したと記されたことから「松前地図」を写したと考えられる。二度目の来航時の一七九七年八月には、日本列島の非常に完全な地図を得たこと、誰から地図を得たか決して言わぬよう強く命じられたことを記している。この「非常に完全な地図」は『改正日本輿地路程全図』を指す可能性が高いとされる<sup>99</sup>。今後のブロートン関連の史料調査を期待したい。

次にアダム・ラクスマン（蝦夷滞在：一七九二～一七九三）来航時に日本から持ち帰った地図について、彼の日誌、科学アカデミーの記録を、他のラクスマン将来品の記録情報と後のレザノフ使節の地図情報と合わせて検討する。ラクスマンが根室滞在中に加藤肩吾と地図情報を交換し「松前地図」の写しを得たことは前述の通りである。ラクスマンの日誌は出来事、訪問者、得た情報や蝦夷地で見聞した風俗、産物、博物学的知見などが詳細に書かれている。ラクスマンの「日本来航日誌」には「松前地図」に関

する情報交換の様相が明記されている一方、『改正日本輿地路程全図』に相当するような正確な日本図を得たという内容の記述はない。

アダム・ラクスマンが蝦夷地滞在中に収集した自然史標本と、かんじき「スノーシュー」、植物「ハゼノキ」から作られた蠟燭などの民俗資料などの珍品は、一七九四年にキリル・ラクスマンが科学アカデミーに送り、同年六月十六日の学術会合でラクスマンの手紙が読み上げられた後、エカテリーナ二世がクンストカメラに移すよう命じた。<sup>(10)</sup> 自然史標本リストは一八〇一年に発行された一七九四年版ペテルブルク帝国科学アカデミー新会報に報告された。<sup>(10)</sup> また自然史標本の和名を含むカタログのコピーは、古文書室に保管された。<sup>(10)</sup> その他、同新会報には日本遠征の概要も報告されているが、正確な日本島の地図を得たという内容はない。第三章で引用したように、キリルは光太夫が描いた日本図を科学アカデミーに送付していた。もし日本遠征でより正確な日本地図を得たならば、必ず科学アカデミーに報告したと推察される。

レザノフ使節の長崎滞在中、ロシア側関係者の航海記に日本の地図情報を示す記述はない。長崎でロシア使節一行は日本側の厳しい管理下に置かれた。さらに日本を去った後、クルーゼンシュテルンがカムチャツカから商務大臣ルミヤンツェフに宛てた一八〇五年六月十一日付の書簡から、長崎滞在中に努力したが日

本地図を入手できなかったことが判明した。そのため、日本の北東部の地名を確認することができず、自ら命名する必要性から、クルーゼンシュテルンの航海に貢献した人物の名前を命名したという。西欧人が「発見」した場所に西欧人の名前を用いて命名することはよくあることではあったが、地図がなく対比すべき地名の名称が不明という事情もあつたのである。クルーゼンシュテルンの一例を挙げると「すばらしい海図コレクション」ほか、航海のために最新機材を準備したゴードアのツァッハを顕彰し、島根の山を「ツァッハ山」と命名した。<sup>(10)</sup> 長崎から日本近海の航海に關し、幕府はレザノフ使節に航行中に沿岸に近づくことを禁止した<sup>(10)</sup> とはいえ、クルーゼンシュテルンが航海記で他に日本人が作成した正確な日本地図を参照した様子はない。航海中に参照した地図は西欧で出版されたアロースミス、ラペルーズ、「太平洋におけるロシア航海者たちの発見地図」等の西欧で作製された海図であつたことが読み取れる。

クルーゼンシュテルンの航海は彼の建議で実現したロシア初の世界周航であり、ロシア皇帝アレクサンドル一世、帝国科学アカデミー、ロシア海軍、露米会社の全面的支援を得たものであつた。さらに日本への使節派遣は彼の案に後から附加された計画であつた。海図も周到に用意された。<sup>(10)</sup> また特命全權使節レザノフは、航海に先立ち科学アカデミーから名誉会員に任命された。<sup>(10)</sup> なぜ、帝

国科学アカデミー所蔵のラクスマン将来の日本地図、あるいはその写しが長崎来航時に携行されなかったのだろうか？ 筆者はこの点も、ラクスマン来航時に『改正日本輿地路程全図』を入手していなかったことに帰すると考える。そしてクルーゼンシュテルンがロシアに戻り、世界周航記のアトラスを出版する際に参照したのは、その時まで科学アカデミーに届いていた『改正日本輿地路程全図』ではなかったかと考える。この紛失したとされる地図の同定と来歴については、今後の史料研究の課題としたい。

これまでに史料を検討した結果、ラクスマン使節、レザノフ使節はどちらも日本来航の際、長久保赤水『改正日本輿地路程全図』に相当する日本図を入手していなかった、という結論に至った。

先行研究により、略奪によつてロシアへ渡つた日本地図情報が報告されている。長崎での対日通商交渉の失敗と日本側の態度への報復として、一八〇六年八月八日、レザノフはオホーツク港に向かうユノナ号の甲板で、フヴォストフとダヴィドフに北方襲撃の秘密の指令を与えた。<sup>10)</sup>これが一八〇六〜一八〇七年のユノナ号とアヴォシ号による樺太・択捉島・利尻島襲撃事件（文化露寇）の発端となった。ロシア側は日本人を拿捕し、蔵や倉庫から食糧や商品を略奪した後、蔵や御堂を燃やした。略奪品のリストには、ユノナ号が略奪した「本の入つた小さな筆筒と海図」の記録があ

<sup>11)</sup> さらに、択捉島で捕虜となつた五郎治による「五郎治申上荒増」に、この時に流出した日本図について興味深い記録がある。

五郎治はオホーツク滞在時に、日本からの略奪品に日本国の絵図や書物があつたことを思い出し、ロシア側に見せるべきではないと、保管された蔵に入つて日本図を持ち帰り、焼き払つた。しかし別の日本絵図一枚がイルクーツクに渡つており、石巻若宮丸漂流民でロシアに帰化した善六によつて全て翻訳されたことを知り、悔しい思いをした。<sup>12)</sup>五郎治はカムチャツカから将来した節用集一冊についても触れているので、日本国の絵図は節用集の日本図とは別の絵図と考えられる。そして善六がイルクーツクで翻訳したという地図が、前出のエストニア国立公文書館のクルーゼンシュテルン地図集に含まれる新蔵・善六訳「日本国の一般図」を指すと思われる。この地図の説明には翻訳者である新蔵と善六のロシア名と一八〇九年に刊行されたことが書かれている。<sup>13)</sup>筆者はこのロシアに略奪され、翻訳された一連の史料が、日本からロシアに直接流出した『改正日本輿地路程全図』とその活用を確実に示す最も古い史料と考える。

以上、日本から西欧に流出した『改正日本輿地路程全図』の最も早い流出時期をまとめる。日蘭関係ルートでは、ティツィングが一七九二年にアムステルダムの子に地図を送付しており、それは同年以降にオランダに届いた。その情報が世に広まり始めたの

は一七九六年十二月にテイティングがロンドンに戻って以降と推察され、一八〇〇年四月にロンドンの月刊誌に記事として取り上げられた。日露関係ルートでは、一八〇六〜一八〇七年のロシアによる略奪により択捉島にあった地図が流出し、それをイルクーツクで翻訳した地図が一八〇九年に刊行された。またイギリスのブロートンは一七九七年に加藤肩吾から『改正日本輿地路程全図』と思われる地図を得た。この図がイギリスに届いたのは同年以降と思われる。これまでに判明した範囲では、いずれも『改正日本輿地路程全図』の西欧到着は一七九二年以降で、地図の存在情報は一七九〇年代末から知られるようになった。地理学上の知識、地名の活用は一八〇九年の新蔵・善六によるロシア語翻訳の刊行以降、地名に関してはテイティング翻訳を用いたクラブプロットのフランス語訳、と後になると考えられる。さらにクルーゼンシュテルンやアロースミスによる地図製作への活用、地理学上の貢献については、先行研究<sup>15)</sup>を参照いただきたい。

#### (5) イギリスの光太夫日本図と光太夫の人物像

光太夫の日本図写しLは、サンクトペテルブルクから一七九三年二月に発送され、同年にイギリスへ到着したと推測される。従って、Lはラペルーズやブロートンによる測量図情報が一七九七年以降に到達する前の三〜四年間、イギリスが入手し得

た最新の「日本の海図」であったと考えられる。これは先に論じたように、西欧の科学者が光太夫日本図に高い関心を示し、雑誌等に公表しようとした時期と一致する。それはテイティングが日本から送った『改正日本輿地路程全図』がオランダに到着すると同時期であった。同地図をブロートンが蝦夷地で得たのは一七九七年、テイティングのコレクションがロンドンで知られるようになるのは一七九六年十二月以降であった。これらの期間もLがイギリスに到着した三〜四年後に相当すると考えられる。その翻訳情報の共有はさらに後になり、ロシア海軍が略奪した地図が翻訳・刊行されたのが一八〇九年、テイティングの翻訳をクラブプロットがフランス語に訳し、自身の業績としてロシアに送ったのが一八二〇年であった。光太夫の日本図がイギリスに届いた時期は、西欧における日本地図が前近代のものから測量値が反映した近代の地図に移行する転換期の直前であり、いわば隙間のような短い期間であった。しかし確かに、西欧の知識人に最新の「日本の海図」とみなされ、注目されていた期間があったのである。

ここでウィットワース書簡の内容とLについて検討する。前述の通り、光太夫の日本図は「節用集」の系統の日本図の写しであり、実測図ではなかった。しかも、ケンペル『日本誌』添付図のような既存の日本地図と比べ、本州と九州が連なる点で異なっていた。それにもかかわらず、イギリス側は光太夫の日本図を「大

変知的な人物」かつ、日本の船頭である光太夫の航海の経験値が実測値に代わり反映した「海図」と捉え、忠実な複製を作成したといえる。十八世紀前半に西欧で出版された「レランド型」や「ケンペル・シヨイヒツアー型」の日本地図の海岸線は画的であつたのに対し、光太夫日本図の海岸線が「非常に正確に」見えたとも解釈できる。日本の地名を記した文字情報は「最も難しい部分」として別々に写されたが、日本図は「航海者は日本島の緯度と経度を決定すると簡単に縮尺を定めることができる」海図として、実用的沿岸地理情報と見なされた。しかしそれを実際に地理情報として活用したか否かについては、今後の研究課題としてい。

光太夫の日本図に描かれた本州と九州の癒着については、伊勢出身の彼の知識にこの地方の地理的知識が欠けていたため、との指摘がある。<sup>117</sup> ウィットワース書簡から、光太夫は西欧で作成された日本地図を見せられていたことが判明した。これは光太夫の帰国後の証言「ロシアの日本」地図は国分迄致し、殊の外精細成る事に御座候<sup>118</sup>とも一致する。おそらく彼はラクスマンやパラスカら本州と九州の癒着について、ケンペルの日本図などと比較し、質問を受けていたと推察される。しかし既存の日本図を見せられても、光太夫は本州と九州のつながりを訂正しなかった。そして前掲のウィットワース書簡によると、光太夫は西欧の日本地図に

ついて「実際とかけ離れてはいないが、それでも細部では非常に欠陥があり、岬間の距離が誤っている」と回答した。一方、判明しただけで七枚もの日本図を描いていたにもかかわらず、光太夫は帰国後に自分がロシアで日本図を描いたことについて、管見の限り一切語っていない。この沈黙は、ロシア滞在時の豊富な体験談が数多く残されていることと対照的である。光太夫は、ロシア側が地図を含め、様々な日本情報を自分から収集していることを自覚していたと思われる。光太夫は強靱な意思を貫き、帰国を諦めず、ロシアに仕官しなかった。そして帰国の手段を自ら模索し続けていた。これらのことから総合して、光太夫が本州と九州を意図的に繋げて描いた可能性もあるのではないだろうか。光太夫は帰国後に咎められないよう、また日本という一国にとつて重要な地図情報をロシアに正しく伝えないよう、原本の紛らわしさを活かし、必ずしも全て正しい情報を提供しなかったのではないか。彼は西欧の日本地図を見せられた時、機転を利かせて「細部に欠陥がある」と述べることで、情報を攪乱させようとしたのではないか。この点は今後の検討が必要であるが、一つの仮説として指摘しておく。

このように光太夫は日本の地図情報の重要性を自覚し、情報を守るべく自ら考え、対処していた。この点に関して択捉で拿捕された五郎治も、光太夫と共通するものを持つていたように思われ

る。両者とも鎖国時代の日本の一庶民ではあつたが、船頭、あるいは番人小頭というリーダー的立場であり、自ら判断する力を養っていたのかも知れない。それにしても想像を超える困難に直面した日本人一人が、図らずも異国ロシアでの生活を余儀なくされた時に、ロシアから日本を俯瞰できたのであつた。ロシアにいながら日本人としてのアイデンティティを失わず、ロシア語を身に付け、ロシアの狙いを把握して日本の国家的危機感を自分のこととして抱くことができた国際人といえよう。これは個人の資質が大きいと思われるが、当時の両者の国際感覚と現状把握、思考力、可能な限りの抵抗を試みた実行力は、時代を越えて現代の我々を強く惹き付ける。

そして光太夫の場合、この危機意識が図らずもイギリスへの正確な地図情報の流出を阻んだともいえる。イギリスは確かに光太夫の海図情報に関心を抱いていたが、それはロシアの対日動向を探る諜報活動の一環でもあつたと思われる。イギリスに残る光太夫関係の史料から、当時のイギリスとロシア、日本の関係について改めて論じたい。

#### おわりに

イギリスで発見された光太夫日本図の写しと、その由来を示す

ウィットワース書簡は、イギリスが当時光太夫の日本図に非常に高い関心を持ち、実際に入手したことを示す史料である。十八世紀末、極東への進出を画策する西欧諸国間の競争を背景に、イギリスが光太夫の日本図を他では入手し得ない「海図」情報として捉え、対日外交、経済、軍事目的のために写しを送つたと考えられる。ウィットワース書簡と光太夫の日本図の写しという二点の史料は、イギリスが日本へ接近しようと画策していたが、この時期にその実現はまだ困難であつたことを示している。これはイギリスが大英帝国として世界に圧倒的な勢力を持つ直前のことでもあつた。光太夫日本図の写しは、西欧諸国による測量図、あるいは長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』のように精細な日本地図がイギリスに渡るまで、三〇四年の短期間であつたが、他に代替物のない貴重な海図と見なされたと考えられる。これは当時の西欧の知識人が光太夫日本図に高い関心を示し、情報を共有し、出版を望んだことから裏付けられる。光太夫日本図の写しが実際にイギリスで活用されたかどうかについては、今後の課題である。

これまで光太夫は、日露関係史の中で、ロシアが日本との通商交渉を実現させるために送還した漂流民と捉えられてきた。本稿で検討してきた史料によつて、光太夫は水面下で同時代のイギリスの対日政策にも少なからぬ影響を与えていたといえよう。光太

夫について、十八世紀末の鎖国政策下の日露関係のみならず、対  
日外交政策をめぐるロシアとイギリスの政治的競合とそれぞれの  
極東政策という文脈の中で再検討していきたい。

〔付記〕

本稿の作成にあたり、文献の翻刻、翻訳等、次の方々にご教示いただいた。  
また記して感謝申し上げます。

松田清博士、Vera Dorofeeva-Lichmann 博士、Tatiana Feklova 博士、

Ian Gladall 博士、Sven Osterkamp 博士、Timon Sreech 博士、

Marie-Christine Skuncke 博士

本稿に掲載した画像の閲覧、掲載を許可下さった以下の機関に感謝申し上  
げます。

Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen

National Maritime Museum, Caird Library and Archive

本稿作成にあたり、多くの方々からのご支援と、多くの先行研究の恩恵を  
受けたことを記して感謝申し上げます。

本稿は J S P S 科研費（課題番号 19K00940）による研究成果の一部である。

注

- (1) 大黒屋光太夫については多くの書籍、論文がある。ここでは以下の書  
籍を参照した。桂川甫周著・亀井高孝校訂『北槎聞略』岩波文庫、  
一九九〇、亀井高孝『大黒屋光太夫』吉川弘文館、一九九二（初版  
一九六四）、山下恒夫編『大黒屋光太夫史料集 第一〜四巻』日本評論社、  
二〇〇三、山下恒夫『大黒屋光太夫——帝政ロシア漂流の物語』岩波新書、

二〇〇四。

- (2) 奥平武彦「ギョッチンゲン大学図書館の日露支関係文書」満鉄各図書  
館報『書香』四五、一九三二、伊藤恵子「アッシュ・コレクションの背  
景（上）——光太夫の記録を残した人々」『窓』八五、一九九三、岩井憲  
幸「ゲッチンゲン大学蔵大黒屋光太夫筆日本図について——書誌学的・  
文献学的の研究」『明治大学教養論集』二六九、一九九四。

- (3) 川上淳「ロシア軍事歴史古文書館から発見された大黒屋光太夫筆日本  
図二枚」『窓』一一〇、一九九九、岩井憲幸「光太夫の署名——ロシア軍  
事歴史古文書館所蔵光太夫筆日本地図発見によせて」『地域史研究はこだ  
て』三〇、一九九九、岩井憲幸『光太夫の日本図』大黒屋光太夫顕彰会、  
二〇〇一、根室市博物館開設準備室編『ラクスマンの根室来航』根室歴  
史研究会、二〇〇三、口絵、川上淳『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』  
北海道出版企画センター、二〇一七、口絵。

- (4) 長谷川孝治・喜多祐子「漂流民の国土描写——新発見の大黒屋光太夫  
日本図を巡って」『日本地理学会発表要旨集』六三、二〇〇三、一七二頁。

- (5) Боголюбов, A. M., "Карта Японии Дайкоку Комаю," in *Труды Государственного Эрмитажа*, т. 72: Эрмитажные чтения памяти В.Л. Луконина (21.01.1932–10.09.1984). К 80-летию со дня рождения. 2007–2012 // СПб: Изд-во Гос. Эрмитажа. 2014, pp. 161–165; Боголюбов, A.M., "Map of Japan by Dalkuya Kodayu," in *Proceedings of the State Hermitage*, vol. 72: Hermitage readings in memory of V. G. Lukonin (01.21.1932–10.09.1984). By the 80th birthday. 2007–2012 / State Hermitage. Petersburg: State Hermitage Press, 2014, pp. 161–165; A・ボゴリュボフ「荒川好子翻訳」露日関係研究資料としてのエルミタージュ国立美術館の日本芸術コレクション」『専修大学人文科学研究月報』二八二、二〇一六。

ロシア語の論文は Vera Dorofeeva-Lichmann 博士からいただいたことを  
記して感謝申し上げます。なおこの論文の細部については、今後の研究報

告が待たれる。

- (9) Takigawa, Y., "Japanese ichthyological objects and knowledge gained in contact zones by the Krusenstern Expedition," in Klemun, M. and U. Spring, (eds.) *Expeditions as experiments - practicing observation and documentation*. Palgrave Macmillan, London, 2016, pp. 73-96; Skuncke, M.-C. and Y. Takigawa, "Scientific relations between Sweden, Russia and Japan in the 1790s: two letters from Eric Laxman," in *Svenska Linnésällskapets Årskrift 2018*, Svenska Linnésällskapet, Uppsala, 2018, pp. 99-138.
- (7) The National Archives, Kew: F. O. 65/124, Whitworth to Grenville, 7 February 1793.
- (8) F・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典2 小項目事典』改訂版 一九八八、六一六頁。
- (9) ケアート図書館「オンライン・カタログ」, "A chart of Japan or Nippon [MS] (GREN1/5)" <<https://collections.rmg.co.uk/collections/objects/555237.html>> (accessed 5 May 2021).
- (10) 前掲注 (2) 伊藤論文 二二頁。Hauser-Schäublin, B. and G. Krüger, (eds.) *Siberia and Russian America: culture and arts from the 1700s, the Ash Collection, Göttingen*. Pöschel Verlag, München, Berlin, London, New York, 2007, p. 10.
- (11) 前掲注 (2) 岩井論文 一六六頁。
- (12) 前掲注 (2) 伊藤論文 二二三頁。
- (13) 山下恒夫編「光太夫が作成したロシア人名簿——『魯西亞文字集』より」  
山下恒夫編『大黒屋光太夫史料集 第三卷』日本評論社 二〇〇三  
六〇七頁、中村喜和・山下恒夫編「ロシア人名簿・各人物略歴」(同上)  
六五〇頁。
- (14) 前掲注 (4) 長谷川・喜多学会発表要旨。
- (15) 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会  
一九九九 一六〇〜一六二頁。
- (16) クルウゼンシュテルン著・羽仁五郎訳註『クルウゼンシュテルン日本  
紀行 上巻(異国叢書 復刻版)』雄松堂書店 一九六六 三三二〜  
三三三頁。
- (17) Borovobon, *op. cit.*, p. 165; 前掲注 (5) ホムリユホフ論文 八頁。シー  
ノースごころでは前掲注 (2) 伊藤論文 二四〜二九頁。
- (18) *Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae, Nova Acta Academiæ  
Scientiarum Imperialis Petropolitanae*, t. 8, Typis Academiae Scientiarum, Petropolis,  
1794 [1790 年版], p. 21.
- (19) *Ibid.*, p. 21. 最初の引用は Lagus, W., *Erik Laxman, hans lefnad, resov, forskningar  
och brevtyckning*. Finska Litteratur-sällskapets tryckeri, Helsinki, 1880, p. 199. など  
同書 p. 223 は誤って「四月二十日」と引用したため、後の文献のこの日  
付を引用したようである。
- (20) 前掲注 (1) 桂川著・亀井校訂 四七〜五〇頁。
- (21) M の製作年月については、画像を入手し検討された Dorofeeva-  
Lichmann 博士の学会報告を参照した。Dorofeeva-Lichmann, V., "Cartographic  
journey of a drift away sailor: maps of Japan by Daikokuya Kodayū 大黒屋光太夫  
(1751-1828)," Paper presented at the International Workshop, "Cartographic  
materials from pre-modern East Asia and approaches to their analysis," National  
Tsing-Hua University, Taiwan, 24 December 2020.
- (22) Parnohl, K. A., "Matthew Guthrie—The forgotten student of 18th century  
Russia," *Canadian Slavonic Papers*, 11, Montreal, 1969, pp. 167-181.
- (23) Mitchison, R., "Anderson, James (1739-1808)," in *Oxford Dictionary of National  
Biography* (online ed.), Oxford University Press, Oxford, 2004, doi: 10.1093/  
refodnb/475. アンダーソンは知的好奇心を持つ様々な読者層を対象にエ  
ンサイクロペディアを週刊誌 *The Bee* (1790-1794) を発行した。
- (24) Arcticus, "Literary News from Russia," May 16, 1792, in Anderson, J., (ed.) *The  
Bee or Literary Weekly Intelligencer*, v. 9, Edinburgh, 1792, pp. 58-63. など 島田孝



- 右編『日英交流史近世書誌年表』ユーリカ・プレス、二〇〇五、二五七頁から、*The Bee* の光太夫の記事について知った。
- (25) 光太夫らが漂着したアムチトカ島はアリユーション列島のラット諸島に属する。現在の地理区分では、フォックス諸島は同じアリユーション列島であるが、ラット諸島とは別の諸島群である。木内信藏ほか日本語版監修『ブリタニカ国際地図』TBSブリタニカ、一九九三、一七〇～一七一頁。
- (26) Lessep, J.-B. *Journal historique du voyage de M. de Lessep, consul de France, employé dans l'expédition de M. le comte de La Prouse, en qualité d'interprète du Roi; depuis l'instant où il a quitté les frégates Françaises au Port Saint-Pierre & Saint-Paul du Kamtschatka, jusqu'à son arrivée en France, le 17 octobre 1788*. 1790. 1<sup>re</sup> partie, pp. 205-211. 山下恒夫「資料紹介バルテレンシー・レンセップスの光太夫印象記」前掲注(13) 山下編、七五九～七六五頁。
- (27) 伊藤恵子「アッシュ・コレクションの背景(下)——光太夫が記録を残した人々」『窓』八六、一九九三、一九～二二頁。
- (28) 前掲注(1) 桂川著・亀井校訂、五〇～五一頁。
- (29) 西村三郎『未知の生物を求めて——探検博物館に輝く三つの星』平凡社、一九八七、一七七～二六一頁。
- (30) 山下恒夫「資料紹介 駐露英国公使ウィットワースの報告書二通」(第二の報告書) (岩崎清訳)「前掲注(13) 山下編、七六九頁。
- (31) 同右「第一の報告書」七六六頁。
- (32) 前掲注(30) 山下編「第二の報告書」七六八頁。
- (33) 前掲注(1) 桂川著・亀井校訂、六二頁。
- (34) 前掲注(2) 伊藤論文、二六～二七頁。
- (35) 同右、二五～二六頁。
- (36) Borovonov, loc. cit., 前掲注(5)「ボゴリノボフ論文」、八頁。
- (37) Arcticus, op. cit., p. 60.
- (38) 亀井高孝『光太夫の悲恋』吉川弘文館、一九六七、二一～三三頁。
- (39) 海野一隆『地図に見る日本——倭国・シパング・大日本』大修館書店、一九九九、一二八～一二九、一四四～一四五頁。
- (40) Hauser-Schäublin, B. and G. Krüger, op. cit., pp. 13, 28.
- (41) 西村三郎『文明のなかの博物学——西欧と日本(上)』紀伊國屋書店、一九九九、六三～六五頁。Gascoigne, J. *Joseph Banks and the English Enlightenment: useful knowledge and polite culture*. Cambridge University Press, Cambridge, 2003.
- (42) Dougherty, F. W. P. *The Correspondence of Johann Friedrich Blumenbach, v. IV: 1791-1795. Letters 645-965. Revised, Augmented and Edited by Norbert Klatt*. Norbert Klatt Verlag, Göttingen, 2012, pp. 346-350, Letter 869, n. 6. Elektronische Ressource, ISBN 978-3-928312-33-2.
- (43) *Ibid.*, p. 347, Letter 869.
- (44) *Ibid.*, pp. 358-359, Letter 878.
- (45) Chambers, N. (ed.) *Scientific Correspondence of Sir Joseph Banks, 1765-1820*. Pickering & Chatto, London, 2007, v. 3, Letter No. 585, pp. 66-67; King, R. J. "The long wish'd for object" — Opening the Trade to Japan, 1785-1795." *The Northern Mariner / Le marin du nord*, XX No. 1, January 2010, p. 9.
- (46) 石原あえか『近代測量史への旅——ゲート時代の自然景觀図から明治日本の三角測量まで』法政大学出版局、二〇一五、五三～九三頁。
- (47) Dougherty, F. W. P. *The Correspondence of Johann Friedrich Blumenbach, v. V: 1796-1800. Letters 966-1359. Revised, Augmented and Edited by Norbert Klatt*. Norbert Klatt Verlag, Göttingen, 2013, pp. 260-265, Letter 1154. Elektronische Ressource, ISBN: 978-3-928312-35-6.
- (48) Zach (ed.) *Allgemeine Geographische Ephemeriden*. Verlage des Industrie-Comptoirs, Weimar, 1. Bd. (1798)-51. Bd. (1816).
- (49) Anderson, M. S. *Britain's discovery of Russia 1553-1815*. Macmillan, London, St

Martin's Press, New York, 1958, p. 201, n. 4.

- (50) Eton, W. Respecting some projects of the Russians on China and Japan. 2<sup>nd</sup> Paper, in *A survey of the Turkish empire*. T. Cadell, jun. and W. Davies, London, 1799, p. 512.
- (51) 木村和男『毛皮交易が創る世界——ハドソン湾からユーラシアへ』岩波書店、二〇〇四、序章、第三章。
- (52) 同右、第三章。
- (53) クック著・増田義郎訳『クック太平洋探検5、第三回航海(上)』岩波文庫、二〇〇五、一一頁。
- (54) 木村和男『北太平洋の「発見」——毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』山川出版社、二〇〇七、第三章、五五〜六七頁。
- (55) 同右、第三章、七四〜八二頁。
- (56) 同右、第六章。
- (57) 横山伊徳『開国前夜の世界』吉川弘文館、二〇一三、二四頁。
- (58) 横山伊徳編『オランダ商館長のみた日本——テイティング往復書翰集』吉川弘文館、二〇〇五、二七七頁。
- (59) 平川新監修『ロシア史料にみる18〜19世紀の日露関係』第2集、東北大学東北アジア研究センター、二〇〇七、一六五〜一六六頁。
- (60) 前掲注(57) 横山著書、二四〜二五頁。
- (61) マカートニー著・坂野正高訳注『中国訪問使節日記』平凡社東洋文庫、一九七五。
- (62) Bevan, M. and B. Thymne, "A Prime Collection of Charts and Maps: The Grenville Collection (GREN)." Royal Museums Greenwich blog, 26 March 2014. <https://www.rmg.co.uk/discover/behind-the-scenes/blog/prime-collection-charts-and-maps-grenville-collection-gren> (accessed 5 May 2021).
- (63) OAG・ドイツ東洋文化研究協会編『西洋人の描いた日本地図——シブングからシーボルトまで』OAG・ドイツ東洋文化研究協会、一九九三。
- (64) 前掲注(57) 横山著書、八八頁。
- (65) Dalrymple, A., "Plan of the harbour of Nangasaky in Japan from an ancient MS. communicated in 1762. by Capt. Alexander Hume to whom this place is inscribed by his most obliged ADalrymple." 31 August 1788. <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bv1b53069774h> (accessed 5 May 2021); Cook, A. S., *Alexander Dalrymple (1737-1808), hydrographer to the East India Company and to the Admiralty as publisher: A catalogue of books and charts*. Vol. 3, *Catalogue B. Catalogue of Dalrymple's charts, views, plans and diagrams*, Part 2: 1784-1794, PhD Thesis, University of St. Andrews, St Andrews, 1993, p. 1337, B572. <http://hdl.handle.net/10023/2634> (accessed 5 May 2021); 前掲注(63) OAG・ドイツ東洋文化研究協会編図録、一三三〜一三七頁の地図中の長崎図。
- (66) Leupe, P. A., *Reize van Maarten Gerritsz. Vries in 1643 naar het Noorden en Oosten van Japan*. Frederik Muller, Amsterdam, 1858. C. スハープ著・永積洋子訳『南部漂着記——南部山田浦漂着のオランダ船長コルネリス・スハープの日記』キリシタン文化研究会、一九七四。
- (67) 前掲注(15) 秋月著書、五〇〜六三頁。
- (68) 同右、一〇五〜一一二、一一六〜一一七、一一〇〜一一三頁。
- (69) David, A. (chief editor), *The charts of coastal views of Captain Cook's voyages*, v. 3. Hakluyt Society, 1997, pp. 232-237.
- (70) 前掲注(54) 木村著書、五三頁。
- (71) 小林忠雄編訳『ラペルーズ世界周航記 日本近海編』白水社、一九八八、四九〜一五五頁。
- (72) 同右、一八〇〜一八二頁。
- (73) 同右、一〇〜一四、一八五〜一八七頁。
- (74) Howay, F. W., *The journal of Captain James Colnett Aboard the Argonaut from April 26, 1789 to Nov. 3, 1791*. The Champlain Society, Toronto, 1940, pp. 242-249; 前掲注(57) 横山著書、一〜四頁。

- (75) Broughton, W. R., *A voyage of discovery to the North Pacific Ocean: in which the coast of Asia, from the lat. of 35° north to the lat. of 52° north, the island of the Iusu, (commonly known under the name of the land of Jesso), the north, south, and east coasts of Japan, the Liuchienx and the adjacent isles, as well as the coast of Corea, have been examined and surveyed: performed in His Majesty's sloop Providence, and her tender, in the years 1795, 1796, 1797, 1798.* T. Cadell and W. Davies, London, 1804. プロビデンス号は一七九七年五月十七日に珊瑚礁で座礁し、スクーターでマカオに戻った後、乗組員を削減しスクーターで再び日本の北方海域に向かった。
- (76) *Ibid.*, p. xii.
- (77) *Ibid.*, p. 380. なお、航海日誌やデータは、プロトトンが帰国するよりも前にイギリスに送られた可能性がある。
- (78) 前掲注(15) 秋月著書、一六〇〜一六二頁、VI・8図。この加藤肩吾自筆の「松前地図」(北海道大学附属図書館蔵)は、同大学附属図書館の北方資料データベースから閲覧可能。(<<https://www2.lib.hokudai.ac.jp/cgi-bin/hoppe/record.cgi?id=0D00090000000000>> (accessed 18 August 2021).)
- (79) 秋月俊幸「日本北辺の地図史から見た初期の日露関係」『ロシア研究』二五、一九九七、七〇頁、前掲注(15) 秋月著書、一六〇〜一六二頁。
- (80) アダム・ラクスマン著・中村喜和訳「日本来航日誌」前掲注(13) 山 下編、四二九〜四三〇頁。
- (81) Postnikov, A. V., "Outline of the history of Russian cartography," in *Regions: a prism to view the Slavic-Eurasian world towards a discipline of "Regionalogy"*. Proceedings of the Slavic Research Center of Hokkaido University summer symposium July 1998, Hokkaido, 2000, pp. 1-49. (<<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/98summer/98summer-contents.html>> (accessed 18 August 2021).; Map of Marmai Island [Hokkaido], p. 43, Fig. 36.
- (82) 前掲注(15) 秋月著書、二〇六〜二〇七頁、VII・9図。アメリカ議会図書館ホームページから画像閲覧可能。(<<https://www.loc.gov/resource/g233-nf000027/>> (accessed 18 August 2021).)
- (83) 前掲注(16) クルウゼンシュテルン著・羽仁訳註「三三三〜三三四頁。Krusenstern, A. J. von, *Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Nadshda und Neva unter dem Commando des Capitains von der Kaiserlichen Marine A. J. von Krusenstern*, Zweiter Th., Schnoonschen Buchdruckerey, St. Petersburg, 1811, p. 31. Sinoko (洲根子、今日の読み方はスネコ)は長久保赤水の日本図には含まれていない。
- (84) 馬場章「地図の書誌学——長久保赤水『改正日本輿地路程全図』の場合」黒田日出男・メアリ・エリザベス・ベリ・杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会、二〇〇一、三八三〜四三〇頁、松井洋子・フランク・レクイン「テイティング・コレクションの長久保赤水『改正日本輿地路程全図』」『画像史料解析センター通信』四五、二〇〇九、小林茂・鳴海邦匡「ヨーロッパにおける長久保赤水の日本図の受容過程」『地図』五六、二〇一八、小林茂・永用俊彦・鳴海邦匡・白井公宏・小野寺淳・立石尚之編『鎖国時代 海を渡った日本図』大阪大学出版会、二〇一九、鳴海邦匡・小林茂「近世日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用」『日本地理学会発表要旨集』セッションID: 八三五、二〇二〇、小林茂・鳴海邦匡「近世の日本で作製された絵図のヨーロッパにおける利用——近年の成果をふまえた展望」『大阪観光学大学研究論集』二二、二〇二二。
- (85) Boxer, C. R., *Jan Campaign in Japan 1600-1817*, Oxford University Press, Tokyo, London, New York, 1968, pp. 143-145.
- (86) 石山禎一・宮崎克則「シーボルトの生涯とその業績関係年表(一七九六〜一八三二年)」『西南学院大学国際文化論集』二六、二〇一一、一六九、二二二頁。

- (87) 前掲注(84) 馬場論文、四一七頁、前掲注(84) 松井・レクイン論文六頁。
- (88) 前掲注(84) 松井・レクイン論文、四〇一頁。
- (89) 前掲注(84) 松井・レクイン論文、四頁。
- (90) シーボルト著・中井晶夫訳『日本』第一巻、雄松堂書店、一九七七、九五〜九六頁、前掲注(84) 馬場論文、四〇八〜四一〇頁。
- (91) Boxer, *op. cit.*, pp. 164-165.
- (92) Anonymous, "Interesting particulars relative to Japan, by M. Tisingh, late ambassador to the Emperors of China and Japan," *The monthly magazine, or British register*, R. Phillips, London, 1800, v. 9, p. 217-221; 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、二頁。
- (93) Posniakov, *op. cit.*, pp. 44-45.
- (94) 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、前掲注(84) 鳴海・小林学会発表要旨、二〇二〇、前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇二一。
- (95) 前掲注(84) 小林ら編著、二二頁、図五・一、新蔵・善六訳「日本国の一般図」一八〇九、エストニア国立公文書館蔵。なおエストニア国立公文書館のホームページで利用者登録後にデジタル画像閲覧が可能。  
[https://www.ra.ee/dgs/\\_purl.php?shc=EAA.1414.2.43-51](https://www.ra.ee/dgs/_purl.php?shc=EAA.1414.2.43-51) (accessed 18 August 2021).
- (96) Krusenstem, I. F., *Recueil de mémoires hydrographiques pour servir d'analyse et d'explication a l'Atlas de l'Océan Pacifique*. De l'imprimerie du département de l'Instruction publique, Saint-Petersbourg, 1827, pp. 130-131.
- (97) 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、五頁。
- (98) Broughon, *op. cit.*, pp. 100-101.
- (99) Broughon, *op. cit.*, p. 272; 氏家和彦・氏家野富美「鎖国下における北方外交の一断面——プロトンの室蘭来航」『公民論集』三、一九九五、五六頁。
- (100) 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、五頁。
- (101) Arr.-co-cr. M. Ф. Храпанович, M. B. Храпанович, Ора. пса. Н. П. Копанева, Ю. К. Чистов, *Летопись Кузнецкзупа. 1714-1836*, СПб.: МАЭ РАН, 2014, 408-409 c. [Author-comp. M. F. Kharanovich, M. V. Kharanovich, Ed. N. P. Kopanec, Yu. K. Chisov, *Chronicle of the Kurstkamena. 1714-1836*, St. Petersburg: MAE RAS, 2014, pp. 408-409.]
- (102) Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae, *Nova Acta Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae*, t. 12, Typis Academiae Scientiarum, Petropolis, 1801 [1794 年版], pp. 25-28; 滝川祐子「ラクスメンの日本産魚類コレクション(一七九二〜九三)——歴史背景とその意義」二〇二〇年度日本魚類学会年会(ウエブ大会)講演要旨、日本魚類学会、二〇二〇、四七頁、滝川祐子「ラクスメンが日本から持ち帰った生物標本(一七九二〜一七九三)——種の同定と生物学史上の意義について」日本動物分類学会第五六回大会(オンライン大会)プログラム、二〇二一、二六頁。
- (103) Arr.-co-cr. M. Ф. Храпанович, M. B. Храпанович, Ора. пса. Н. П. Копанева, Ю. К. Чистов, *op. cit.*, 409 c. [Author-comp. M. F. Kharanovich, M. V. Kharanovich, Ed. N. P. Kopanec, Yu. K. Chisov, *op. cit.*, p. 409.]
- (104) Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae, t. 12, *op. cit.*, pp. 36-38.
- (105) I. F. Курльзенштелернから N. P. Роллянтшешенへの書簡。日本西岸地域とサハリンの記述について。平川新監修『ロシア史料にみる18〜19世紀の日露関係』第一集、東北大学東北アジア研究センター、二〇〇四、一一五〜一六頁。
- (106) 前掲注(46) 石原著書、一七八〜一八〇頁。
- (107) 前掲注(16) クルウゼンシュテルン著・羽仁訳註、二九三頁。
- (108) 前掲注(16) クルウゼンシュテルン著・羽仁訳註、六四頁。
- (109) 科学アカデミー会議事録より。N. P. Релзэрновをアカデミー名誉会員に任命することについて。前掲注(105) 平川監修、六二頁。

- (110) A・A・キリチエンコ著・伊賀上菜穂訳「海賊船ユノナ号とアヴォン号——ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件」『東北アジア研究』六、二〇〇二。
- (111) 同右、キリチエンコ著・伊賀上訳論文、九八頁、平川新監修『ロシア史料にみる18～19世紀の日露関係』第5集、東北大学東北アジア研究センター、二〇一〇、一三八頁。
- (112) 中川五郎治「五郎治申上荒増」秋月俊幸翻刻・解説『北方史料集成』第五卷、北海道出版企画センター、一九九四、四九五～五六三頁。
- (113) 同右、中川五郎治、五三九頁、大島幹雄『魯西亞から来た日本人——漂流民善六物語』廣済堂出版、一九九六、一七〇～一七一頁、前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、五～六頁、前掲注(84) 小林ら編著、五八～五九頁。
- (114) 前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、五頁、前掲注(84) 小林ら編著、五八頁。
- (115) 中村拓「赤水図の欧州における評価」『地理』一三、一九六八、前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇一八、前掲注(84) 小林ら編著、前掲注(84) 小林・鳴海論文、二〇二二。
- (116) 前掲注(63) OAG・ドイツ東洋文化研究協会編、一三二～一四四頁。
- (117) 前掲注(1) 亀井著書、一九四～一九六頁。
- (118) 大場惟景編「亜魯齊亜漂流民記聞」前掲注(13) 山下編、一八八頁。

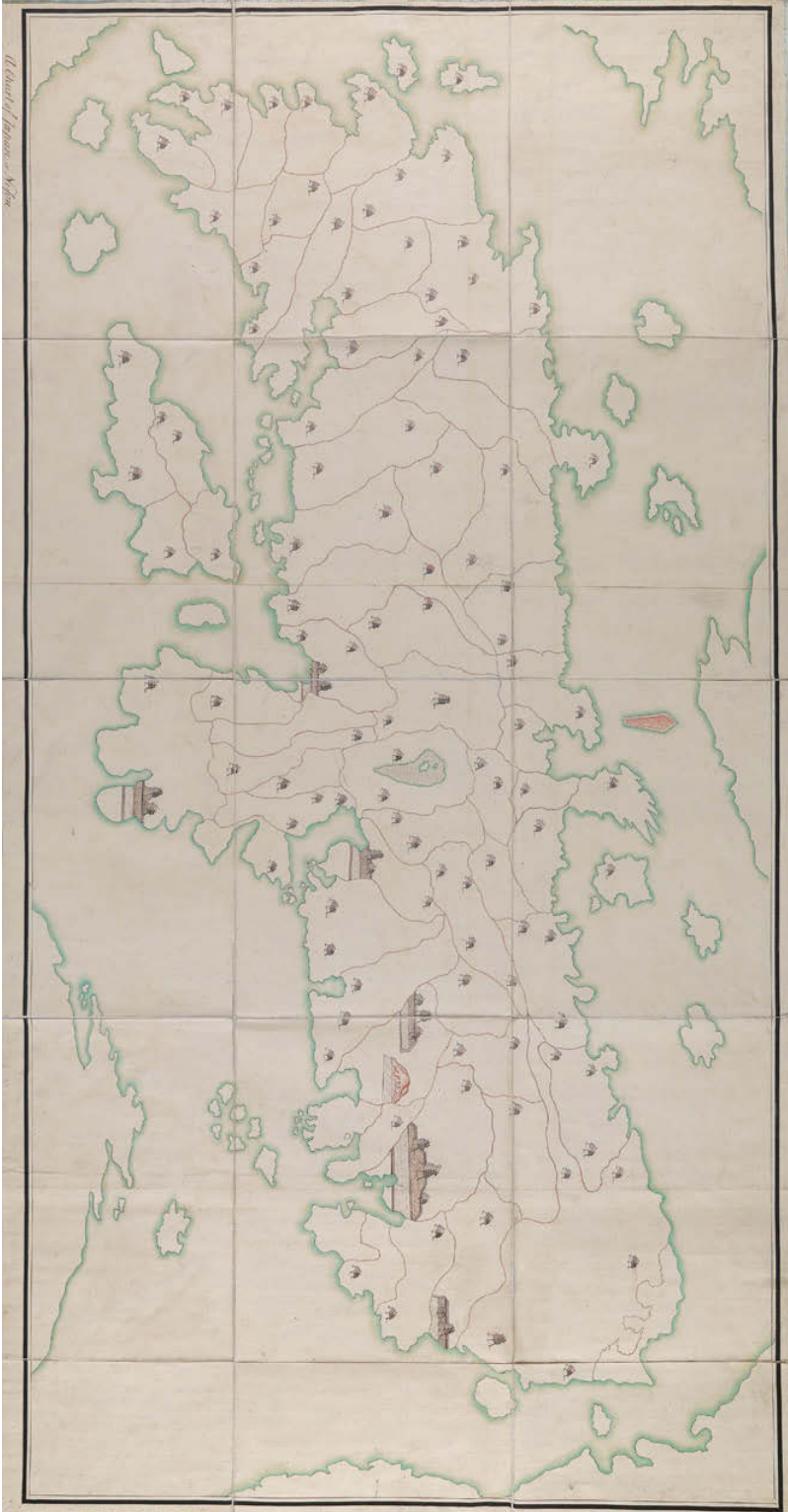


図 1 英国海事博物館ケアード書館所蔵の大黒屋光太夫日本図の写し (GREEN1/5)  
©National Maritime Museum, Greenwich, London, Caird Collection.



図2 ゲッテンゲン大学図書館 大黒屋光太夫自筆の日本図 Asch 284  
©Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Cod. Ms. Asch 284.



図3 ゲッテンゲン大学図書館 大黒屋光太夫自筆の日本図 Asch 285  
 ©Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Cod. Ms. Asch 285.





図4 ゲッチンゲン大学図書館 大黒屋光太夫自筆の日本図 Asch 286  
©Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Cod. Ms. Asch 286.

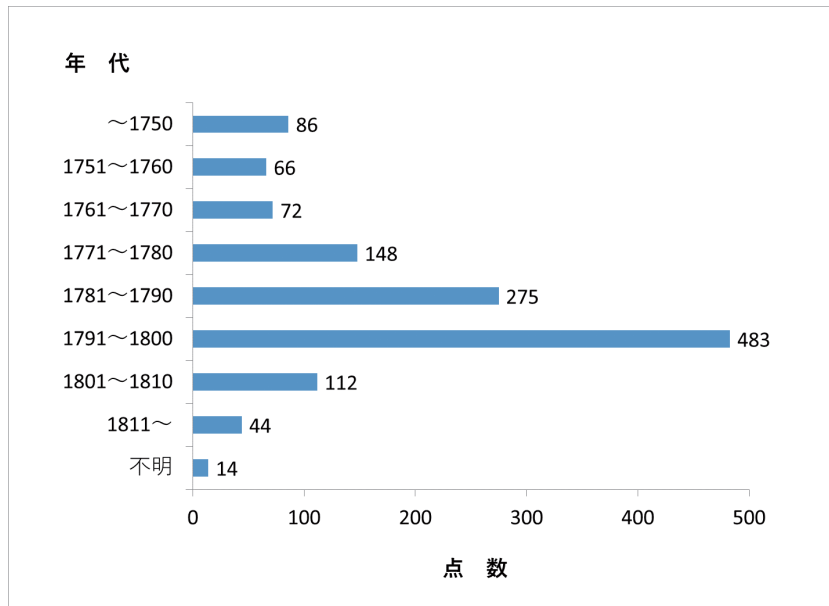


図5 グレンヴィル・コレクションを構成する海図・地図の出版・作成年代  
 英国海事博物館ケアード図書館のオンライン・カタログより作成。再版、改訂版等の場合はその出版年をデータとして利用した。

表 1 大黒屋光太夫自筆の日本図とその写しの比較

所蔵機関	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ゲッティンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ロシア軍事歴史 古文書館 (ロシア、モスクワ)	ロシア軍事歴史 古文書館 (ロシア、モスクワ)	エストニア国立 公文書館 (エストニア)	エルミタージュ 美術館 (ロシア、サンクト ペテルブルク)	国立海事博物館 ケアード図書館 (イギリス、ロン ドン、グリニッジ)
資料略称	G1 (図2)	G2 (図3)	G3 (図4)	M1	M2	E	H	L (図1)
登録番号	Cod. Ms. Asch 284	Cod. Ms. Asch 285	Cod. Ms. Asch 286	Φ. 451, N° 18	Φ. 451, N° 19	EEA1414.2.43 14h 64	不明	GREENI/5
寸法 (cm) *料紙 **枠外側	65.6 × 126.5* 64.6 × 125.8**	64.6 × 137.2* 62.2 × 121.2**	65.4 × 124.0* 61.8 × 120.0**	62 × 126	60 × 120	72.6 × 148.4	74.5 × 148	65.0 × 123.5
作者、印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 手書□○印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 □印○印	光太夫自筆 □印○印	ウイットワースに よる写し
作成年 [作成地]	天明9 (1789) 年 7月28日 [イルクーツク]	天明11 (1791) 年 3月下旬 [サンクトペテル ブルク]	天明11 (1791) 年 3月吉日 [サンクトペテル ブルク]	天明11 (1791) 年 3月下旬 [サンクトペテル ブルク]	天明11 (1791) 年 4月 [サンクトペテル ブルク]	天明11 (1791) 年 3月上旬 [サンクトペテル ブルク]	天明11 (1791) 年 (月不明) [サンクトペテル ブルク]	1793年2月7日以前 (カタログ情報は 1790年) [サンクトペテル ブルク]
文献	奥平 (1992) 亀井 (1992) 伊藤 (1993・上) 岩井 (1994)			川上 (1999, 2011) 岩井 (2001) Dorofeva-Lichmann (2020)		長谷川・喜多 (2003)	Bogolyubov (2014) ボコリユボフ (2016)	本稿
枠	朱赤	朱赤	朱赤	朱赤	黒	薄赤、外黄	色不明	黒
瓶の朱丸	あり	なし	なし	なし	あり	あり	あり、色不明	なし
方位記号 色/枠の色	赤/赤	赤/黄	赤/黄	赤/赤?	黒/赤	なし	あり (色不明)	赤/薄黄
国境線	赤と緑が重なる	黄	黄	赤	黄、橙、赤、青、 緑	黄	色不明	赤 (赤茶)
津軽/方外ノ浜	緑色、 陸地と区別	黄色、 陸地と区別	黄色、 陸地と区別	色なし 陸地と同じ	黄色、 陸地と区別	色なし、 陸地と区別	色不明、 陸地と区別	色なし、 陸地と同じ
富士山西側小峰	あり (極小)	あり	あり	なし	あり	あり	あり (極小)	なし
富士山の位置	駿府城の北	駿府城の南東、湖 南東端が相模に接 する	駿府城の南東、湖 南東端が相模のみ に接する	駿府城の南東、湖 南東端が相模と伊 豆境界に接する	駿府城の南東、湖 南東端が相模のみ に接する	駿府城の南東、湖 南東端が伊豆に接 する	駿府城の南東、湖 南東端が相模と伊 豆境界に接する	駿府城の南東、湖 南東端が相模と伊 豆境界に接する

所蔵機関	ゲッチェンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ゲッチェンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ゲッチェンゲン大学 図書館 (ドイツ)	ロシア軍事歴史 古文書館 (ロシア、モスクワ)	ロシア軍事歴史 古文書館 (ロシア、モスクワ)	エストニア国立 公文書館 (エストニア)	エルミタージュ 美術館 (ロシア、サンクト ペテルブルク)	国立海事博物館 クアード図書館 (イギリス、ロン ドン、グリニッジ)
資料略称	G1 (図2)	G2 (図3)	G3 (図4)	M1	M2	E	H	L (図1)
江戸城と石垣	天守1、櫓3 側面図	天守1、櫓2 奥行感あり	天守1、櫓2 奥行感あり	天守1、櫓2 奥行感あり	天守1、櫓3 側面図	天守1、櫓2 石垣上部山状の側 面図	天守1、櫓2 石垣上部山状底辺 段差	天守1、櫓2 奥行感あり
江戸城堀と 湾の位置	東のみ接する	中央部接する	中央部湾が入る	中央部湾が入る	接しない	中央部湾が少し入 る	中央部接する	中央部湾が入る
水戸城と太平洋	接する	接する	接する	接する	接しない	接する	接する	接する
水戸城 天守閣の位置	西	西	東	東	櫓と同じ、高さ差 なし	西	西	東
大坂城 天守閣の位置	西	東	東	東	西	東	東	東
紀伊和歌山城 天守閣の位置	東	東	西	西	西 (差なし)	西	西	西
尾張名古屋城 天守閣の位置	東	西	西	西	西	西	西	西
仙台西側櫓	なし	なし	なし	なし	あり	なし	なし	なし
琵琶湖の 竹生島の形、 北側の小島	波形 北小島なし	波形 北小島有	円形 北小島有	不明 北小島有	不明 北小島有	波形 北小島有	不明 北小島有	波形 北小島有
上野、下野の 境界線、出羽へ 延長	なし	なし	なし	あり	なし	なし	なし	なし
四国の東側 南北線	なし	あり (折目)	なし	なし	なし	なし	なし	あり

Lと同じ特徴を持つ項目をグレーで示した。

表2 西欧人による大黒屋光太夫の日本図についての記録

史料の種類	史料タイトル、項目名、差出人/受領人	日付 (差出/受領、出版日)、地名、出版地など	内容	所蔵機関/出典 (※本文の脚注no.)
雑誌	<i>The Bee</i> , ロシアからの文芸ニューズ、“Arcticus” [ガズリ] から <i>The Bee</i> の編集者 [アンダーソン] 宛	1792年5月16日号 v.9, pp. 59-60. 出版地: エディンバラ	日本の商人コダーについての人物像、海図作成に従事する様子を描写。(本稿に和訳掲載)	<i>The Bee</i> (※24)
書簡	ウィットワースからグレンザイル宛	1793年2月7日サンクトペテルブルクから送付 [ロンドンへ、受領日不明]	日本島の非常に興味深い海図 [=図1] を送付することについて。(本稿に和訳掲載)	英国公文書館 E.O. 65/24
手稿目録	ゲッチンゼンの王立学術博物館へ [寄贈する] 地図と手稿図の目録、アッシュからハイネ宛	1793年4月3/14日 [旧暦/新暦] アッシュ、サンクトペテルブルクから送付 1793年6月22日受領 [ハイネ、ゲッチンゼンでの受領日]	35. 日本語の文字で記入された日本地図。 [=Asch 286、図4] 36. ロシア語と日本語の文字で記入された日本地図。 [=Asch 285、図3] [35. と 36. を括り注記] 1791年にサンクトペテルブルクで日本人ドイコクヤ [「マ」] によって描かれ着色された。	ゲッチンゼン大学図書館 Cod. Ms. Asch 1 : 2 (1793/99), 12r
雑誌	ロシアからの文芸ニューズ、“Arcticus” [ガズリ] から <i>The Bee</i> の編集者 [アンダーソン] 宛	1793年5月15日号 v.15, p. 70 出版地: エディンバラ	日本の海図: 「日本の海図がどこにあるか発見、編集者のためにコピーを入手した。」編集者は海図が到着したら印刷し出版する、と記す。	<i>The Bee</i>
雑誌	ロシアからの文芸ニューズ、“Arcticus” [ガズリ] から <i>The Bee</i> の編集者 [アンダーソン] 宛のまとめ	1793年7月3日号 v.15, p. 331 出版地: エディンバラ	編集者は、光太夫が所持していた海図から描いた日本地図がまだ出版されていないことに言及。	<i>The Bee</i>
手稿目録	ゲッチンゼンの王立学術博物館へ [寄贈する] 地図と海図の目録、アッシュからハイネ宛	1794年5月22日 / 6月2日 [旧暦/新暦] アッシュ、サンクトペテルブルクから送付 1794年7月14日受領 [ハイネ、ゲッチンゼンでの受領日]	8. 日本の地図。手書き、イルクーツクから受け取った。 [=Asch 284、図2]	ゲッチンゼン大学図書館 Cod. Ms. Asch 1 : 2 (1793/99), 42r, 43r

史料の種類	史料タイトル、項目名、 差出人/受領人	日付 (差出/受領、出版日)、 地名、出版地など	内容	所蔵機関/出典 (※本文の脚注no.)
書簡	ゾルメンスバッハからバンクス宛	1794年9月24日ゲッツチンゲンからロ ンドン [到着1794年11月14日以前]	最近図書館に送付された大型の日本の海図 について。日本の文字で印刷[「マ」]され、 手書きのロシア語による説明書き有。[= Asch 284] (本稿に和訳掲載)	Letter 869 (※42)
雑誌	ペテルズルク・ロシア帝国科学アカ デミー新会報第8巻1790年版	1790年5月17日の事項、p. 21 1794年発行 出版地：サンクトペテルズルク	1790年3月20日付、イルクーツクのラクス マソンの手紙と、大黒屋光太夫が描いた 日本の地図を受領したことを報告。(本稿に 和訳掲載)	<i>Nova Acta</i> , t. 8, 1794 (※18)
雑誌	ツアツハ編 『天文地理学雑誌』書評欄	1798年5月号 p. 561 出版地：ワイマール	<i>Nova Acta</i> , t. 8, 1794の1790年5月17日 の 事 項、光太夫日本図に関する部分をドイツ語 に訳し転載。	<i>AGE</i> , (※48) vol. 1, no. 5, May 1798
書簡	ツアツハからゾルメンスバッハ宛	1798年5月22、27日、フォータからゲッ チンゲンへ	日本 [図に関する寄稿] と地図 [複製?] を送って下さったら、非常に嬉しい。ラペ ルーズの海図と批判的に比較し、『天文地理 学雑誌』に縮小版複製を掲載可能と述べる。	Letter 1154 (※47)
書籍	イートン著 『トルコ帝国概説』	1799年出版、p. 512 出版地：ロンドン	種々の添付書類の欄、ロシア人による中国 と日本に関する計画について。難破した日 本の船長が日本沿岸の海図を所持しており、 それがヨーロッパで作成されたものと幾分 異なっていたと記述。	Eton (1799) (※50)
書籍	Krusenstern, <i>Reise um die Welt</i> クルセゼンシュテルン著 『クルセゼンシュテルン日本紀行』	ドイツ語版第2巻 pp. 30-31 (1811年) 出版地：サンクトペテルズルク (邦訳 上巻 pp. 332-333、1966年)	光太夫が所持し、ロシアに残した日本の海 図について。	Krusenstern (1811) (※83) クルセゼンシュテルン (1966) (※16)

表3 日本沿岸の測量を伴う航海

期間 (西暦) (日本近海通過時)	指揮官 (国名) 艦名	出版年 出版地	出版物	日本近海の実測地
1643 (1643.5.19 八丈島付近、同年6月～9月) 日本北辺地域)	フリース (蘭) カストリクム号 (アレスケンズ号)	手稿海図 1858 アムステルダム	ヤンソニウス (1650) 以降の西欧地図に影響 航海記 (Lampe, 1858)	北海道東部太平洋側、エトロフ島、ウルツツ島、サハリン島南部
1738～1739 (1739.6～7)	シュバンベルグ (露) (第2次ペーリリンツ探検隊の別働隊・元文の黒船) ボリシエレツク号他3隻	ロシア科学アカデミー『ロシア帝国地図帳』(ヤンクトベテルブルク、1745)の「ロシア帝国全図」に反映		千島列島から仙台湾へ至る海域、南千島諸島、北海道東部
1776～1780 (1779.10.26～11.15)	クック (第3回航海) (英) レソリエーション号 デイスカバリー号	1784.6 ロンドン	航海記	東北地方から房総半島までの太平洋沿岸；硫黄島周辺。
1785～1788 ボタニー湾出航以降遭難 (1787.5.5 与那国島～日本海～タタール海峡付近～宗谷海峡～同年8.19 エトロフ沖)	ラペルーズ (仏) アソール号 アストロラーベ号	1797 パリ	航海記 アトラス	与那国島、魚釣島、能登半島、(沿海地方沿岸～間宮海峡付近～サハリン島西部)、宗谷海峡 [ラペルーズ海峡]、(アソール水道通過)
1789.4～1791.11 (1789.5 下旬トカラ列島～八丈島付近) (1791.8 北九州から島根沿岸)	コルネット (船長) (英) アムゴート号 (私貿易船)	手稿海図 1940 トロント	アロームニス (1811) に航跡反映 航海記 (Howay, 1940) に手稿海図掲載	宍岐、玄界灘～島根までの日本海沿岸
1792.9～1793.9 (1792.10～1793.8 蝦夷滞在)	ラクスラン (露) エカテリーナ号	手稿海図 1880 ヘルソンキ	クルーゼンシュテルンのアトラスに一部反映 伝記 (Lagus, 1880) に地図2点掲載	根室、厚岸、根室から厚岸、函館から松前
1795.2～1798 (1回目1796.9～1796.12; 2回目 [沖繩で座礁、マカオから再出発] 1797.7 琉球～同年9.7 蝦夷北端)	プロートン (英) アロビデンス号 小型スクーター船	1804 ロンドン	航海記	絵鞆 (室蘭)、千島列島、八丈島、琉球、宮古島；琉球、本州太平洋側、絵鞆、津軽海峡 (～間宮海峡付近)
1803～1806 (1804.9～1805.4 長崎滞在； ～日本海北上～蝦夷北端 1805.5)	クルーゼンシュテルン (露) ナジエージダ号	露語：本文1809-1812、アトラス1813; 独語：本文1810-1812、露独語アトラス1814、いすれもサンクトペテルブルク	航海記 アトラス	四国から長崎までの岬・島、長崎の水路、日本海側の本州北部、蝦夷西海岸から宗谷海峡 (～サハリン東岸)

主に秋月 (1999)、OAG・ドイツ東洋文化研究協会編 (1993) を参照し、各航海記 文献を基に作成。

